
ドラスティック・ガール

和泉-izumi-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラスティック・ガール

【Nコード】

N6883Q

【作者名】

和泉 - izumi -

【あらすじ】

中等部三年・吉瀬 麻穂はある目的を持って、全寮制共学私立・杉浦学園へと転入してきた。
揺れる恋心を描く学園ラブストーリー。

少女、吉瀬麻穂はこの杉浦学園中等部にやってきた。
ある目的を果たすため、自分のため、覚悟を決めて。

「門限は八時、事情がある場合は事前に寮長の私に相談のこと」

艶やかなセミロングヘア。白い肌にアーモンド形の目。小さな赤い唇。細い首筋。まとうは真新しいブレザーの制服。吉瀬 麻穂は寮長の言葉をひとつひとつ頷いて聞いていた。

「以上が寮の施設の説明になるわ。よろしくて？ 吉瀬さん」

「はい、如月寮長！ 案内と説明ありがとうございます」

背の高い寮長の隣で、大きなボストンバックを抱えた麻穂は、笑顔で頷いた。

寮長・如月雪乃はその長い髪をなびかせて、麻穂に向き直った。

「分からないことがあったら何でもわたくしにお聞きになって」

「はい」

麻穂が深く頷くと、「さて」と言っつて凜々しい雪乃の瞳が少し曇った。

「ここからが面倒なんだけれど、貴方のルームメイトを紹介するわ」
雪乃の言葉に麻穂は首を傾げた。

「面倒、なんですか？」

目をぱちくりしていると、雪乃が咳払いをして歩き出した。

あわててそれを追いかけると、雪乃は一番奥の部屋の前で止まった。そして手の裏で上品に扉をノックする。

「ここが私の部屋ですか？」

「そうですねすけれど」

返事がないことに苛立ちを見せて雪乃は大声を張り上げた。

「片岡さんっ！ 片岡涼！ 出ていらっしやい！」

そして扉のノブをいじったが、鍵がかかっていて開くことは無か

った。

しばらくすると部屋の中から「やべっ」と声が聞こえて、雪乃は腰に手を当てて足を鳴らした。

ようやく扉が開いたと思ったら、勢いよく開きすぎて雪乃の顔をぺたんこにしまった。

「悪い悪い、寝過ごした……ってあれ？ あんた誰？」

麻穂は部屋から飛び出てきた寝癖のついたロングヘアの少女・片岡 涼と見詰め合って苦笑いを浮かべた。

そして怒りに眉を寄せた雪乃が涼に噛み付くまでにそう時間はかからなかった。

「何をなさいますの片岡さん！」

「あ、そんなところで何してんのさ、寮長」

「貴方の扉の開け方ががさつ過ぎるからわたくしがぶつかったのよ！」

「マジか。どんまい」

ちっとも悪びれた様子を見せない涼に雪乃は今にも火を吹き付けるドラゴンにでもなりそうだった。

麻穂の目の前で涼は寝癖でジャージのままだ。髪は雪乃と同じくらい長く、背も雪乃より高かった。落ち着いた声が、きんきんと響く雪乃と対照的だ。

「で、寮長、この子は誰さ？」

二人の言い合いに全然けりがつかず麻穂がぽかんと置いていかれているとき、涼が雪乃に尋ねた。

「そうですね、今日はこの子を貴方に紹介しにきたんですの」

雪乃は咳払いをして仕切りなおした。どうやら咳払いは彼女の儀式的なクセのようだ。

「紹介？」

「今日から貴方のルームメイトになる吉瀬麻穂さんよ」

麻穂は改めて涼にお辞儀をしたが、涼はただ目を見張っていた。眠気も一気に覚めたようだ。

「え、嘘だろ？ あたしは相部屋は受け付けてないって言ってる……」

「理事長先生直々のお達しですわ」

涼の言葉をさえぎって雪乃が言い放つ。

「さ、吉瀬さん、荷物を入れてしましましょう」

ずかずかと中に入っていく雪乃に続いて、申し訳なさそうについていく麻穂。その様子をただ呆然と見ていた涼は、ふと我に返ると散らかった部屋の片付けを慌ててやりだした。

「片岡さんはルームメイトとしては最悪だと思いますわ、吉瀬さんには心から同情いたします。しかし決まってしまったことですもの。頑張ってちょうだいね」

心から哀れむように言う雪乃に苦笑いを返した麻穂は、せわしなく動き回る涼に声をかけた。

「片岡さん、よろしくお願いします」
ぺこりとおじきをする。

涼はそれを困ったように見つめ、頭をかき、「おう」と軽く返事をするにとどめた。

涼の片づけが終わると麻穂の荷物を広げて、涼の物置と化していた二段ベッドの下を麻穂のために空けた。

「じゃあ、ごゆっくり」

ある程度形が整うと、雪乃は部屋を去っていった。

二人きりになると急に沈黙が重苦しく思えてきて、麻穂は涼の顔をうかがった。

「あの、ご迷惑でしたか？」

涼は一瞬視線をそらして考え込んでから、

「いや、迷惑ではないけど……なんていうか……」
と言葉を濁した。

麻穂は肩身が狭くて未だに立ちっぱなしだった。それに気づいた涼が「座って」と進めて、ようやく床に座った。

涼もあぐらをかいて床に座った。

「麻穂って呼んでいい？」

髪をかき上げて涼は尋ねた。

「うん。私は何て呼べばいいですか？」

「涼でいいよ。あと敬語もやめて、同じ年なんだから」

気さくな涼の様子に少し気おされながら、麻穂は「うん」と頷いた。

「どこからきたの？」

「同じ都内から。理由があって転入してきたの」

「うちの学校は転入には厳しいはずだけど、理事長と親しいの？」

涼の鋭い眼光がきらめいた。

「あの、私、本当は杉浦麻穂って言うの。吉瀬はお母さんの旧姓で、そっちのほうが都合がいいだろうってことで吉瀬で転入してきたの」

涼は眉をひそめた。

「それじゃあ、あんたは」

「杉浦学園理事長の孫なの」

涼は深く長いため息をついた。

「マジかよ」

「皆にはなるべく秘密にして。コネで入ったとバレるとよくないから……」

「分かったけど、分かったけどなあ」

涼は頭をかきながら立ち上がった。

そして今麻穂が着ているのと同じ制服をハンガーごととって、「着替えるからあっち向いてて」と麻穂に指図した。

ワイルドなのに着替えは覗かせないあたり女の子だなあと思いつながら、麻穂は口を開いた。

「どうしたの？」

衣擦れの音が聞こえる。

「ちょっと用事が出来た。でかけてくるから、部屋でゆっくりしてて」

そついうとあつという間に着替え終わった涼は、髪をブラシでと

かして靴下を履いた。

着替えて身だしなみを整えた涼は、雪乃と同じクールビューティな雰囲気を持っていた。

「あたしの荷物はいじるなよ。爆発するからな」

爆発なんてするわけないだろうと苦笑いしながら、「いつてらっしゃい」と麻穂は手を振った。

一人残されると部屋は急にがらんと広く見え、こんな広い部屋に涼は一人で暮らしていたのかと麻穂は驚いた。

相部屋は受け付けていないといっていたが、何か理由があるのだろうか。麻穂は少し考えてみた。

（女嫌いとかかな？）

かなりワイルドに振舞っていた彼女だ。女の子らしい女の子が苦手なのかもしれない。

（あるいは、他人が居ると気になって眠れないとか）

そんなデリケートな少女が昼過ぎまで寝過ごしているとは考えがたいが、他人の存在が気になるのは人なら誰でもあることだし寮ではつきものだ。彼女一人が特別扱いされるわけないだろう。

そして麻穂はしばらく考え続けていた。

休日で皆出払っているせいか寮はかなり静かで、足音ひとつ聞こえてこなかった。

この寮で、涼と、この学校で、うまくやっていけるかどうか若干不安に思いながら、「いやいや」と決意を新たにした。麻穂には目的がある。この学校にきた明確な理由が。それを果たすためだと自分を叱咤するのだった。

この杉浦学園は中等部・高等部からなる私立の学校で全寮制だ。麻穂は中等部三年、雪乃と涼も同じだ。特に決まった宗教などは持たず、有名大学への進学率のいい学校だ。

そして涼は一時間ほどして帰ってきた。

顔には疲労が刻まれているように、麻穂は思った。

「おかえり」

「ああ」

麻穂の言葉に軽く返事してから涼は床に寝転んだ。

「制服にしわがついちゃうよ」

麻穂が注意すると、涼は仕方がなさそうに起き上がった。

こう口うるさいことを言ったら余計に迷惑がられるだろうかと思
って、麻穂は少し口をつぐんだ。

黙りこんだ麻穂に、涼は立てひざをして向き直った。

「ねえ、麻穂。率直に訊くけどこの学校に來た理由って何？」

涼の視線は鋭くて、麻穂は思わずびくつとしてしまう。けれど、

麻穂は首を横に振っていった。

「それは、言えない」

麻穂の言葉に涼はしばらく彼女を見つめたままだった。

涼の澄んだ瞳に見つめられて思わずドキツとする麻穂。涼の眼差
しは何か深いものを包含しているようで、その考えは読み取れな
かった。

「ふうん」

涼は髪をかきあげて興味を失ったようにあぐらをかいだ。

しばらく何も発しない時間が続いた。涼は何かを深く考え沈黙に
強いようだったが、麻穂は沈黙に耐え切れず声を発した。

「私、制服着替えちゃうね」

そう言ってブレザーを脱ぎだすと、涼は急にあわあわと慌てだ
して自分の二段ベッドの上にもぐりこんでしまった。

「女のくせにはしたないぞ！ 着替えは人の見てないところでやれ！」

（そう言っても同室だからなあ……）

麻穂は涼の徹底的な女らしさの追及に苦笑しつつ、ベッドに背を
向けて着替えした。

「着替え終わったよ！」

私服に着替え終えた麻穂が涼を呼ぶと、涼はちらつと麻穂のほう
を見てそれからベッドを降りた。

その後涼も制服から私服に着替えたが、その間も麻穂はずっと背を向けさせられていた。

着替えが終わった二人は、涼の提案で親睦を深めるためゲームをすることにした。それも格闘ゲームだ。麻穂はやったこともなかったが、涼はかなりやりこんでいるらしくどれだけハンデをつけても麻穂は勝てなかった。

麻穂はワイルドな涼に最初少しびくびくしていたが、思ったより気さくな人なんだと気づき、嬉しくなった。ゲームによって二人の距離は確かに親密になった。

そうして翌日、麻穂の登校初日となった。

起床時間になっても、長い髪をベッドに遊ばせてぐっすり寝込んでいる涼を何とかゆすり起こして寮で朝食をとる。涼は人気者らしく色々な人間に挨拶をされており、その度に麻穂を紹介してくれた。おかげで麻穂が覚えきれないくらいの人間と友達になることが出来た。

麻穂は涼が昨日と違うのに少し驚いた。昨日は制服をきちんと着ていたのに、今日はブレザーを着ずにネクタイをゆるく結んでいるだけだった。昨日と違って少し不良っぽくは麻穂の心の中だけの秘密だ。

学校は寮から5分ほど離れた場所にあり、麻穂は涼と二人で学校を目指した。

涼は口調は悪いが性格はそんなにぶっきらぼうではなく、面倒見がよくて親しみやすい性格だということが分かり、麻穂はすっかり信頼を置いていた。

麻穂はここに転入する前、祖父に頼んだ際に”いわくつきの部屋”でいいならこの部屋を紹介してもらった。しかし、ルームメイトの涼とすっかり打ち解け、全然いわくつきなどではないと安心していた。

朝食時に雪乃に会ったが、「吉瀬さん、こんな野蛮人と一晩過ごせました？」という心配そうな口調にも「大丈夫です」ということが出来た。雪乃と涼は相性が悪いんだなあと麻穂は苦笑いを浮かべるしかなかった。雪乃は「また教室で」と優雅に去っていった。

涼とのんびり学校に向かっていると、大きな校門が見えてきた。

「あれが学校？」

「そうだよ。麻穂、学校見学もしないで転入してきたわけ？」

「だって、急いでたんだもん……」

言葉を濁す麻穂に涼は肩をすくめた。

学校の通りの丁度向こう側からはブレザーを着た男子生徒たちが校門へ急いでいた。

「あっちには男子寮があるの？」

「ん？ ああ、そうだよ。女子寮とは真逆にあるんだ」

と言って涼ははるか遠くを指差した。

麻穂が「ふうん」と何か思案しているような表情をしていたのを涼は見逃さなかった。

学校に到着して、麻穂はまずその校舎と向き合った。

時計台のある棟を中心に左右対称に広がっており、奥のほうは木々に隠れてうかがえない。真新しいというわけではないが小奇麗なコンクリートの三階建ての建物だった。

窓からはちらほらと登校する生徒が見受けられ、時計台の下の開かれた正面玄関に生徒たちが吸い込まれていつていた。

周りは自然が多く、花壇も多かった。自然と調和した学校なんだろう、と麻穂は思った。

「ほら、早く行くぞ」

涼に背中を押されて麻穂は玄関へ急いだ。

男子生徒と合流したが、涼のその人気は女子だけに限らないようだった。色々な男子が涼に挨拶をしていた。そして麻穂のことを訊いていた。

麻穂は涼と同じクラスだと聞いていたので、自分の下駄箱をすぐに探し出すことができた。

真新しい白い上履きを履いて、人々の注目を集めながら三階の教室へ向かった。

教室に着いたときには既にチャイムがなっていて、涼は自分の席についた。麻穂はどこに座ればいいか分からずに教室の隅で担任の到着を待った。

「野郎ども、朝だー」

やる気の無い声を発しながら入ってきたのは、髪を一本に束ね、

白いシャツとタイトな黒ズボンの似合う引き締まった体の女性だった。年は若く、大学生のような風貌だ。細いフレームの眼鏡を押し上げて教室内をぐるっと見渡した。

「あらっ、君は吉瀬だね」

「は、はい」

麻穂と目を合わせるとにかつと笑って、

「担任の園山みことです。席はそうね、一番後ろの一番奥のあそこに座って」

担任園山は麻穂を後ろの席に着かせた。前と横を女子に囲まれており、麻穂は少しほっとした。

「みんな、今日からうちのクラスに吉瀬麻穂ちゃんが転校してくることになった。仲良くやりな」

園山は麻穂に挨拶するようアイコンタクトをとる。

「吉瀬麻穂です。よろしくお願いします」

教室から歓迎の拍手が起こる。麻穂はその小さな頭を一回小さく垂らしてから着席した。

「えーと、寮での同室は、片岡！ てめえか。面倒見てやんな」

まるでやくざの姐さんのような口調に麻穂は圧倒されていたが、教室の面々はもう慣れていているようだ。

「分かってるっつーの」

涼が一番後ろの真ん中の方の席から声を張り上げる。彼女のぶっきらぼうな返事に、園山はにんまりと笑みを浮かべた。何か意味深長な微笑みは、麻穂を少し不安にさせた。

そんなこんなでホームルームが終わり、早速の移動教室。音楽の授業だ。音楽室の分からない麻穂が不安そうな顔をしていると、後ろから声をかけられた。

「おせーぞ麻穂、早くしろ」

「涼」

見知らぬ集団の中で唯一面識のある人間の声に、少しほっとしてしまった。

麻穂は手早く真新しい教科書と前の学校で使っていたアルトリコーダーとソプラノリコーダーを持った。

音楽室は普通の教室と変わらない広さといった感じだったが、ピアノが二台あるのが麻穂の前に居た学校と違っていた。

「ここは席自由だから、あたしの隣にすわんな」

と言つて涼がどかつと席に座つて足を組む。

スカートから覗く涼の足は妙に筋肉質だった。

麻穂は遠慮がちに彼女の隣の席に腰掛ける。

クラスの男子生徒が音楽室の後ろで騒いでる声がする。麻穂がそつと振り返つて一瞥するのを見た涼は、ひらひらと手を振った。

「ほつとけほつとけ。この年の男子つてのはうるさいのが仕事みたいなもんなんだから」

「あ、別に気にしてないよ、大丈夫」

「あつそ」

涼は軽く返事をする、音楽の課題曲の楽譜に目を通しだした。

「あ、その曲、前の学校でやってたよ！」

麻穂が楽譜を覗き込んで言う。共通点を見つけて嬉しそうだった。

「じゃあ教えてくれよ。あたし歌は駄目なんだよな」

そついつて涼は眉を寄せた。

麻穂は首を横に振った。

「私、伴奏者だったの」

そついつて指をしなやかに動かしてみせた。麻穂の指は細くて長くて、折れてしまいそうな美しさを持っていた。

「へえ、麻穂つてピアノ弾けるんだ」

口調こそ驚いていたが、然程意外ではなさそうに涼が言う。

麻穂は「下手だけどね」と苦笑した。

授業が始まつて、麻穂は実際に涼の歌声を聞いたが本人の言うとおりやはりあまり得意ではないようだ。なんというか、高い音が出ていないように麻穂は思った。

授業が終わり、教室に戻るときのことだった。

麻穂は教師と話す背の高い男子生徒を見つけた。制服をきつちりと着こなし、いわゆる好青年といった感じだった。上履きの色からして同学年。麻穂はその少年がどうも気になって仕方が無かった。「なーに見とれてんだよ、麻穂」

涼が教科書で麻穂の頭を叩く。

「いや、見とれてるっていうか……美形な人もいるんだなあと思っ
て」

「それを世間は見とれてるっていうんだぜ」

涼は肩をすくめて言った。

「まあ目を奪われるのも仕方ねえか。あいつは学校中の女子の噂の
的だからな」

やっぱりそうなんだ、と思って麻穂は「ふうん」と呟く。

「涼は？」

「あたしは男なんて興味ないから」

大袈裟に笑って見せる涼は、確かに男子には興味がなさそうだった。自分自身が男子に匹敵するくらい十分ワイルドだったからだ。

「あいつは高時祐真って言うんだけど……」

その瞬間だった。麻穂は持っていた二本のリコーダーを勢いよく
落としてしまった。

「ちよつ、麻穂！ 大丈夫か？！」

涼が慌てて拾って麻穂に手渡す。

「ごめん、ちよつとびっくりしちゃって……」

どう見ても動揺している麻穂に、涼は眉をひそめた。

「何？ あいつと知り合いなの？」

「うっん、違うの。ちよつと手を滑らせちゃって」

麻穂はかろうじて微笑みをたたえていたが、涼はその隙を見逃さ
なかった。

「高時は学年で一番頭がいいんだ。教師たちにも気に入られてる。
男子寮の寮長をやっているらしい」

「そうなんだ……」

麻穂は、どう見ても何か考えているだろう表情で涼の言葉を受け取った。

次の授業、数学と国語は麻穂はすっかり上の空だった。涼はそれをしばらく観察していたが、いつの間にか爆睡して教師に起こされていた。

四時間目になり、体育の授業のため着替えなければならなかった。クラスでは、男子が廊下で着替えて女子が教室の中で着替えるのがしきたりらしく、男子がわらわらと出て行った。

麻穂が涼と一緒に着替えようと思い彼女のほうを振り返ったが、何故か彼女はそそくさと教室を出ようとしている。

麻穂はよく分からずに小首をかしげていると、前の席の女子生徒が麻穂に耳打ちした。

「涼はいつもトイレで着替えるのよ。皆で着替えるの嫌なんだって」「へえ」

そういえば、麻穂は涼が制服に着替えるところも見ることが無い。どうも肌をさらすことに抵抗があるようだ。

麻穂は疑問に思いながら手早く着替えてしまう。新しいジャージはまだ体に馴染まなかった。

それからしばらくして涼が長い髪をなびかせて、ジャージで颯爽と登場した。

背の高い涼はジャージ姿がすごく決まっていた。寝巻きがわりにきているジャージの時とは別人のようだと思っただ。麻穂は思った。

涼は麻穂を連れて校庭へ出た。

今日の授業は短距離走だった。麻穂は運動が苦手なので非常に憂鬱だった。

準備運動を終えて、教師の話をきいたあと、男女別に四人まとめて100メートルを走る。走ることに繰り返しだった。

麻穂は何度走っても最下位だった。

「お前ってどんくせーなあ。もっと足を前に出すんだよ」

涼が呆れて麻穂に口を出す。

「そんなこといわれても、実際にやるのは難しいんだよ」

半泣きになりながら抵抗すると、涼は「よし」と言っただけで麻穂の顔を覗き込んだ。

「あたしが走るのを見てろ」

そう言うのと涼は走ってスタートラインまで行ってしまった。

体育だというのに髪を結ばない涼は、髪が振り乱れていた。

教師が掛け声をかけて一斉に皆スタートする。男子四人女子四人で一列で走り出したが、涼はすぐにその中で頭一個、どころか二三個分は前に出た。

そして男子すらも追いつけないままにぶつちぎりで一着だった。

走り終えたというのにさほど息もあがっていないようで、それにも麻穂はびっくりした。

「速いね……」

麻穂が感服して小さく拍手すると、涼は満更でもなさそうにこう言った。

「周りがおせえただけだよ。俺は普通だって」

「俺？」

麻穂は思わず目を見張る。

「お、俺?! 今あたしそう言った?!」

涼はどうみても動揺した様子だった。

麻穂は不思議そうに涼の目を見ていた。

「すっかり言っちゃったんじゃないかな。気にしないで!」

「う、うん……」

麻穂は涼のうっかりに苦笑いしながら走る列に戻った。

麻穂にはそんなことよりも、考えなければならなかった。そう、高時祐真のことだ。

麻穂は放課後、涼と一緒に寮に帰宅した。涼はあれだけの運動神経があるのにも関わらず部活動には参加しておらず、学校が終わるとすぐに寮に帰っているようだ。麻穂は部活動をやるつもりはなかったたので、見学することなく涼について帰った。

帰宅してからは宿題をやったり、新しい学校の授業についていくために科目ごとに涼に進度を確かめたりした。あっという間に日は暮れて、夕食の時間の七時半となった。

寝巻き兼部屋着と化しているジャージ姿の涼と、私服に着替えた麻穂は一緒に食堂へ向かった。

寮の食堂は広く、一つの学年なら丸々入ってしまうくらいだった。夕飯はハンバーグだった。涼はそれを前から楽しみにしていたように、上機嫌に給食の列に並んだ。

「おばちゃん！ あたしの大盛りで頼むよ！」

親しげに話しかける相手は、寮の食堂のおばちゃん。

「はいよ、涼ちゃんは食べ盛りだからね」

愛想よく応じてくれるおばちゃんとは、涼はかなり仲がいいようだ。

「あと、この子は麻穂ってんだ。こいつちっこいから沢山食わしてやってくれよな」

そういつて涼に強引に紹介された麻穂はぺこりと頭を下げた。

「じゃあ麻穂ちゃんも大盛りにしておくわね」

おばちゃんがにつこり微笑んで言うものだから、小食な麻穂も苦笑いで「ありがとうございます」というしかないのだった。

席についた二人は、いただきますと合掌してすぐに食べ始めた。

「おいしい……！」

麻穂が感動したように口を抑えながら発言する。

「だろ？ この寮はハンバーグがうまいんだ」

涼がしゃべらないものだから、ただ黙々と食べ続ける二人の者に迫る人影があった。

その人物はご飯をむさぼる涼の頭をバシンと引っぱたいた。

「いってえ！ 何しやがんだ！」

二人が顔を上げると、そこにいたのは髪の高い女子生徒だった。

「寮長！」

「如月さん」

この女子寮の長を務める如月雪乃だった。眉間にしわを寄せて二人を見下ろしている。

「ちよつと、あなたに頼みたいことがありますの」

不機嫌そうに腕を組んだその姿に、麻穂はすぐに食器を置いた。

しかし涼は相手が雪乃だと分かると再び食べ始めた。

「で、何の用だよ？」

「食べながら喋らないで下さる？！」

雪乃が強引に食器を取り上げると、やっと涼が向き直ってくれる。

「つたく、なんだよ」

雪乃はコホンと咳払いをしてから声を潜めた。

「あなたがた、猫を見てないかしら？」

「猫お？！」

涼が大きな声を出したので、雪乃はその口を慌てて手で塞いだ。

「ちよつと、わたくしが声を潜めているのに大声を出さないで下さる？！」

いらだつ雪乃と「わりい」と頭をかく涼を交互に見ながら、麻穂は状況を見守っていた。

「実は、猫が逃げ出したのよ」

雪乃が顔を近づけて二人に言う。涼は片眉をあげて尋ねた。

「寮長、この寮は猫なんて飼ってよかつたんだっけ？」

その質問に雪乃はため息をつく。

「4組の佐倉さんと吉沢さんの部屋。捨てられた子猫を拾ってしまったというので、特例で猫を飼うことを認めていたの」

「へー、特例ね」

嫌味っぽくいう涼を雪乃はキツと睨み付けて、

「わたくしの裁量よ。悪い？」

と言い放った。

涼は手元にあつた水を一杯のみほすと、雪乃にストレートに訊いた。

「別にー。それで、あたしたちに何をしてほしいのさ」

「門限まであと20分、ちょっと外を見てきてほしいの」

麻穂はすっかり暗くなつた窓からの景色をちらりと見やった。ちよつと危ないのではないかと思つたが、涼は「いいよ」と快諾した。

「その代わり、一回、門限破りを見逃してくれよな」

「なっ、何をおっしゃつてるの?!」

「報酬もなしに協力なんて出来ないよなあ、麻穂？」

麻穂はそこで自分に話をふるかと思つてはいともいいえともつかない返事をして濁した。

「あなたは人でなしですわ!」

「そんな人でなしに頼みごとする方が悪いんだろ」

「だって、あなたくらいしか夜道を歩かせても平気そうな女子がないんですもの」

さらりと言つてのける雪乃。それがさも当然かのように言っている。

涼は思わず苦笑した。

「わーったよ。晩飯食つてからな」

そついうと涼は雪乃から食器を取り返して急いでご飯をかきこみだした。

そして急いで寮の玄関に向かった。涼は下駄箱から自分のスニーカーを取り出して急いではきはじめる。

そこに、急いで食事を終えて追いかけてきた麻穂が一言はなつた。
「涼、如月さん！ 私も探すのを手伝います!」

先に靴に履き替えていた雪乃は目を丸くして、

「手伝つてくださるのは嬉しいけれど、この土地の地理にはまだ明るくないんじゃないかって？」

「いや、つーかこんな夜に女の子がでかけるのは危ないだろ」

「ちよっと、わたくしだって探しにいきますのよ！」

雪乃の言葉を全く聞かず、涼は麻穂を押しとどめていた。

「涼だって女の子じゃない。私も皆の力になりたい」

麻穂がそう言つと、涼は困つたように押し黙つてしまふ。髪の毛を無造作にかきあげて、雪乃の方を見た。

「本人が協力したいといつてるんですし、いいんじゃないの」

「そう、か。とにかく気をつけろよ」

涼は麻穂の肩にぼんと手を置いて、重々しくそう言った。

「ありがとう！ 私も頑張つて探すね」

麻穂は急いで下駄箱から靴を持ち出して、二人の後を追つた。

寮を出ると辺りは街頭も少なく暗闇に支配されていた。民家の明かりが妙に頼もしく思えたのは気のせいではないだろう。

寮を出てすぐに三叉路に別れている。三人は顔を見合わせて頷いた。

「猫は金の鈴のついた赤い首輪をしているアメリカンショートヘア。まだ子猫ですわ。」

「分かった。麻穂、気をつけろよ」

涼が頷いて、麻穂にも声をかける。

「大丈夫」

「さあ、門限が近いですわ」

そう言つて三人はそれぞれの方向に駆け出した。

麻穂は一人、薄暗い道を駆けた。学校とは反対の方向に走つていく。

左右の路地を見渡しながら、猫を探す。

暗闇に目が慣れてきたので、動くものが次第に認識できるようになつてきていた。

それでも猫らしき姿は見つけられず、もう少し遠くまで足をのばそうとしていたときのことだった。

路地から人の話し声が聞こえた。

「猫一匹ぐらいいいじゃねえか、お前何様のつもりだよ……！」

猫という言葉が耳について、麻穂はそつと気配を消して路地に近づいた。

そつと頭を出したその瞬間、聞いたことも無いような鈍い音がこだました。

見ると、背の高い少年が、しゃがみこんだ男の子に向かって勢いよく拳を振り下ろしていた。

「いてえっ！」

殴られた少年の隣に立っていたもう一人の男の子が、「この野郎！」と言つて背の高い男の子に殴りかかる。

長身の少年は上半身をはらりと翻してそのパンチをかわし、その男の子に回し蹴りを食らわせた。そして余裕そうに言い放つ。

「ふーん、反撃するんだ。だったらこつちも手加減しないけど」

麻穂は偶然遭遇してしまった暴力の現場に絶句していた。気配を消すのも忘れて、半ば腰が抜けていた。

「に、にげるぞっ！」

男の子二人組みは麻穂にも気づかず、路地を抜け出し走り去ってしまった。

麻穂はその場で動けなくなつてた。

逃げなくてはと思うのに、足が動かないのだ。

そして残った一人の少年が、麻穂のほうを振り返る。

「君、誰？」

冷たい声が夜の空気にこだました。少年が麻穂へ歩み寄ってくる。麻穂はぎゅつと拳を握った。

距離が１メートルくらいに詰まったところで、麻穂はその少年の顔を確認した。

「高時、祐真？」

麻穂は暗闇の中目をこらした。
相手はびくつと体を震わせて、

「何で僕の名前を？」

と、さも親切そうな穏やかな口調でたずねてきた。

麻穂は相手が高時祐真だと分かるとキツとにらみつけた。

昼間に涼と音楽室からの帰りに目撃した背の高い好青年・高時祐真。学年一の女子からの人気を誇るという彼に、麻穂は何か理由のありそうな感情を抱いているようだ。

「さ、最低よ！ 暴力漢！」

麻穂の言葉に然程動揺は見せず、麻穂のすぐ近くまで来ると彼女を見下ろした。

「君、見たことない顔だけど、杉浦学園の子？ だとしたらちよつと困るんだけどな」

麻穂は部屋着のまま外に出てきてしまったので服装で判別がつかないようだ。麻穂は黙っていた。

「あれ？ よく見ると君可愛いね」

祐真が薄い微笑みを浮かべて麻穂に手を伸ばしてきた時だった。

「麻穂ー！」

「涼……！」

麻穂を探す涼の声が夜の住宅街に響いていた。

「涼？ 片岡 涼のこと？ じゃあ君は杉浦学園の人間ってこと？」
祐真は伸ばした手を引つ込めて腕を組んだ。

涼は学園でも有名な人だ。涼と友達だと知れば杉浦学園の人間だとばれてしまっても道理だろう。

「麻穂どこだ？！」

「涼ー！」

麻穂は一生懸命声を振り絞って、涼の名を叫んだ。

祐真はやれやれと肩をすくめて、

「じゃあね、マホちゃん」

と麻穂の肩をぽんぽんと叩いてから、女子寮の方向とは逆に走り

去って行った。

麻穂がその後姿を警戒しながら見送っていた時だった。
ニャーオ。

猫の鳴き声がした。

路地の奥は行き止まりになっていて、そこに糸のようなものが絡まった猫が一匹横たわっていた。目をこらして見てみると、金の鈴のついた赤い首輪をしているアメリカンショートヘアだった。雪乃が言っていた特長に合致する。麻穂は猫にそつと手を触れた。

「麻穂！」

そこに涼が駆けつける。

いつものジャージ姿に長い髪をなびかせた涼が現われて、麻穂は内心ほつとする。

「お前、いつまで経っても帰ってこねえから、心配したんだぞ」

「ごめんなさい。涼、猫がいた！」

「マジか！」

涼は走り回っていたのか額の汗を拭って、麻穂の手元を覗き込んだ。

「ひでえ、悪戯されたんだな」

涼がかみつかれないよう多少強引に猫を押さえて、糸を解いていく。

「寮に戻ってハサミで切ったほうがいいんじゃない？」

麻穂の提案に涼は首を横に振った。

「いや、猫の飼い主の奴らがこんな姿見たらショックを受けるだろ」

「そっか……」

涼の配慮に少し心を打たれた麻穂は、涼がほどくのを手伝った。そして手伝いながら、もしかしたらさつき祐真が暴行した二人の男の子は、この猫で遊んでいたのではないかという可能性にたどりついた。それを制止するために暴力という手段に出たのでは。麻穂は一瞬申し訳ないことをしてしまったかと思っただが、いいや、と思いき直す。どんな時でも暴力は悪いこと。それに好青年とは名ばかり

のとなでもないナンパ野郎だったし、と麻穂は自分に言い聞かせた。

「よし、これでいいだろ。麻穂、猫抱いてってくれよ」

「う、うん」

人慣れしている猫のようで、簡単に抱くことが出来た。

そしてすぐに雪乃と合流し、三人は門限ギリギリで寮に戻った。

涼と麻穂は寝るまでの時間を、涼の持っているたくさんのテレビゲームをしながらすごしていた。

「なあ麻穂？」

涼はコントローラを握りしめながら声をかけた。レーシングゲーム中、画面の中の車が激しくドリフトする。

「そういえばさっき、麻穂を迎えに行った時、誰か男の影が見えたような気がしたんだけど、誰かと一緒に居たのか？」

麻穂は一瞬ぎくつとしたが、あくまでも平静な声色を保ったままこたえた。

「関係ない人だと思うよ」

なるべくテレビの画面に集中しながら答えた。

「あのさあ、麻穂。慣れないことはしないほうがいいぜ？」

涼が視線もくれずにため息混じりに言う。

「な、何が？」

多少うわずった声で答える麻穂は、瞳をすばやく動かしだした。

「嘘ついてるだろ。分かりやすいぐらい態度が変わってる」

麻穂は涼の言葉に、嘘を貫き通すか正直に話すか少し迷っていた。「ほら、その沈黙でもう”私は嘘ついてます”って証明してるようなもんだろ」

涼はゲームの車を見事一着でゴールさせると、コントローラを手放して麻穂に向き直った。いたずらな笑みを浮かべながら。

「話しちまえよ。楽になるぜえ」

「涼ってば、ずるいよ」

麻穂はテレビをにらんでいた視線を涼へと移すと、半分泣きそうな声で悲痛に訴えた。ゲームの車はゴール前でエンジンをふかしている。

「あたしはもつとうまく嘘をつくからな」

と言つて、ふふんと髪を耳にかきあげた。

麻穂はしばらく涼とにらみ合つて、ふうと息を吐くと、「負けました」と肩を落とした。

「あのね、あの時路地に高時祐真がいたの。知らない男の子二人に暴力を振るつてるところを見ちゃって……」

涼は真剣な顔で聞いてきた。

「麻穂は高時と一体どういう関係なの？」

「え？」

麻穂が分かりやすいくらいに動揺する。

「だって、あたしが昼間一回だけ言つた高時の名前をフルネームで覚えてるなんて、何かあるとしか思えないじゃん」

何とか取り繕う言葉を探して視線をさまよわせる麻穂をじーっと観察して、涼はひとつの答えを出した。

「もしかして、高時に惚れた？」

にやつくでもなく至つて真面目な顔で訊いたのだが、麻穂はむきになって「そんなわけないでしょ！」と叫んでいた。

「否定するところがますます疑わしい……麻穂って彼氏いないの？」

涼が自分の顎に手を添えて、まるで推理をする名探偵のように言葉を紡ぐ。

「彼氏はできたことないけど、私はちゃんと自分で恋愛して、自分で相手を選ぶよ。たとえ遅くなつてもそれが人を好きになるってことだと思つし」

少し落としていた目線を上げて、しっかり涼の目を見据えて麻穂が言う。涼はそれに応えるように視線を送っていた。

「恋愛ねえ」

麻穂の言葉を心の中で反芻させながら涼がぼそつとつぶやく。

麻穂は今度は反対に疑問を投げかけてみた。

「涼は彼氏とかいないの？」

「いるわけねーじゃん」

即答されたが、麻穂は屈せず言い返した。

「いるわけないわけないよ。涼、美人だもん」

涼は片眉を上げて、ゆっくりと言葉を繰り返した。

「あたしが、美人だと？」

「うん」

麻穂はコクリと頷く。

「やめてくれよ、気持ち悪い」

涼はげっそりした表情になって肩を寄せた。

それを見て麻穂は必死にフォローを入れる。

「お世辞じゃないよ！ 本当にそう思ってるんだから！」

「いや、本当に思われてたらそれこそ本当に鳥肌立つわ」

「涼は遠慮しすぎだよ、もっと自信もって！」

「もたねえよ」

そういつて涼は自分の勉強机に向かつてしまった。

麻穂はしばらくその背中を見つめていた。涼は着替えを見せないし、褒め言葉も素直に受け取らない。何かあるのではないかと麻穂は考えていた。

涼は自分の学校指定学生かばんを取り出して教科書を出し入れしている。

麻穂はふと気がついて、テレビ画面の中でエンジンをふかしっぱなしの車をゴールまで進める。ようやく全部の車がゴールしてゲームが終了する。麻穂はゲーム機のスイッチを切ると、自分も机に行つて明日の準備をし始めるのだった。

翌日、寝坊した涼を必死に引っ張りながら麻穂は登校した。その際に登校する人の流れの中できよろしていると、寝ぼけている涼にだるそうに指摘された。

「高時さがしてるんだろ？」

「ち、違うよ！」

麻穂は慌てて否定するが、その姿がまた怪しいとばかりに涼はい

たずらに微笑んだ。

「もうっ、早く行かないと遅刻しちゃうよ！」

麻穂は怒って一人で歩き出す。涼は大腿で歩いてそれに余裕で追いついていた。

教室に行くと麻穂は早速新しいクラスメイトに挨拶をされていた。クラスにうまく馴染んでいる様子を見て、涼は少し安心してあくびをひとつした。

「おはよー、涼」

クラスメイトの女子の一人が涼に話しかける。涼が「はよ」と短く挨拶した。

「麻穂ちゃんと一緒の部屋はどう？ 涼ずっと一人部屋だったもんね」

「んー、まあな。相部屋も悪いもんじゃねえとは思っけど」

涼はぎこちなく肯定して、何か含んだ様子だった。

そこに会話の輪から抜けてきた麻穂が顔を出した。

「涼、何の話してるの？」

麻穂が無垢な表情を向けているのを見て、クラスメイトの女子はにつこり笑ってこういった。

「麻穂ちゃんは可愛いなって話してたの。ね、涼？」

「ばっ、馬鹿いうなよ！ あたしはそんなこと言っていないだろ！」

突然むきになって言い返す涼をきょとんと見つめ返しながら、クラスメイトの女子は言う。

「じゃあ麻穂ちゃん可愛くないってこと？」

その言葉に涼は一瞬たじろいだ。

「だ、そんなことも言っていないだろ！」

そう言って麻穂のほうを一瞬ちらりとうかがうと、きょとんとした表情で麻穂が見つめ返していた。

涼は思わず顔を赤くした。

「涼、何赤くなってるの？」

麻穂が不意に尋ねると、涼は顔を手であおぎながら「なんでもね

えよ」とはぐらかした。

「ちよつと、片岡さん？」

その時突然現われたの、如月雪乃だった。相変わらずの優雅な仕草だった。

「あん？ 何だよ」

涼が顔をあげると、目の前には数学のノートが差し出されていた。「勉強の予習をしていたのですけれど、この問題が分かりませんの。あなたなら分かるんじゃないかって？」

涼は雪乃の差し出したノートを受け取ると、眉を寄せてにらめっこを始めた。

麻穂は内心、プライドの高い雪乃が相性の悪い涼にわざわざ質問しにくることを意外がっていた。それを察したのか他の女子生徒が耳打ちする。

「涼は学年でもトップクラスの成績なのよ。雪乃より上のね」

「意外……あつ」

麻穂は思わず本音をつぶやいてから口を塞いだ。

問題を解き終わった涼が片眉をあげながら

「アホ面で悪かったな」

と麻穂に言い放つ。

「ほらよ、ここはこの公式を使って出た解をこっちに当てはめて…

…」

雪乃に説明していく涼を見て、麻穂は本当に勉強が出来るんだと感心してしまう。

授業が始まると、涼は眠りっぱなしだった。麻穂は感心した自分が馬鹿みたいだと思った。

考えるのは昨晚のこと。

高時祐真との邂逅。昼間はあんなに好青年だったのが、夜は暴力漢。

確かに見た目が格好いいのは麻穂も認める。しかし暴力を振るう

人間を許すことは絶対に出来なかった。

それにしてもどうして彼はあんな時間にあんなところにいたのだらう。そして傍にいた猫。

「わかんないなあ……」

思わずシャーペンのお尻を噛んでつぶやいた麻穂の頭上から、担任・園山の声が降ってくる。

「何がわからないって？」

その顔は満面の笑みだが、その後ろには冷たい感情が見え隠れしていた。

「えっと、あの、その、この問題が……」

麻穂が適当に英語の穴埋め問題を指差すと、園山はにっこりと言いつつ放った。

「そこは今答え合わせをしたばかりのところだろう？ 吉瀬」

「あつ、そうでした、すみません……」

教室の関心が自分に注がれるのを感じながら、麻穂は肩身を狭くした。

「じっくりしてくれよ。まあ……」

園山の目つきが急に険しくなったと思ったら、一番後ろの席の涼を指差して大声を張り上げた。

「同室の片岡も寝てるけどな！」

「うわあ、なんだってえ?!」

涼が寝ぼけ眼で飛び起きると、クラス中に笑いが起こった。

「二人してあたしの授業で上の空ったあいい度胸だ。放課後職員室に来い！」

麻穂は泣きそうな顔をして「えっ」と思わず声を漏らし、涼は「ええ〜?!」と大声で不満を垂れた。

麻穂がちらつと涼を見ると、涼と視線が合う。涼は目尻を指で吊り上げて、園山の真似をしてみせた。

麻穂がそれに思わず笑いそうになると、麻穂の隣の席の女子生徒が先に少し笑った。

「吉瀬さんって意外と大胆なのね」

小声でそういわれて、麻穂は思わず目を見開いた。

「うんうん、もっとおりこうさんでおとなしい子かと思ってた」

前の席の女子生徒も振り返って賛同する。

「そう、かなあ」

麻穂が不思議と照れたように笑ったところに喝が飛ぶ。

「コルア！ てめえら、通知表に0つけてやろうか?!」

園山が一括すると三人は一斉に姿勢を正した。

涼はそれを見てケタケタと笑っていた。

放課後、涼と麻穂は帰宅の準備をし終わると、職員室へ向かった。もっとも、涼は最初からボイコットする気でいたのだが、麻穂がやはり行かなくてはならないと説得して二人で行くに至る。

「めんどくせえよ」。園山の呼び出しなんてシカトしたって問題ねえって」

「ダメだよ涼。ていうか、園山“先生”って呼ぼうよ」

麻穂が苦笑しながら注意する。

「いいんだよ。あいつはそういうの気にする奴じゃねえし」

「あいつって、口悪いよ、涼」

麻穂がしょうがなくなたしなめると、涼は舌を出してかわした。

帰宅や部活に賑わう人ごみを抜け、二人は教室からそう遠くない職員室へ。

職員室に入るとまずコーヒーの香りに包まれた。喫茶店かと思うくらいだ。放課後を無事に迎えた教員たちが午後の一杯をかわしているところだったのだろう。

「片岡じゃないか」

いきなりがたいのいい角刈りの男性教員に話しかけられて、涼はその人を見上げた。

「ああ、大作センセ」

涼がそっけなく頭を下げる。すると大作はその頭を片手で丸々掴

んでしまった。

「うわっ、やめろ！ 何しやがる！」

涼がそこから暴れて抜け出すと、乱れた髪の毛そのままに大作にくっつく。

「お前は本当に運動部に入らないと勿体無い女子だよな。って、一年の頃からずっと言ってるのになあ」

「あたしは汗とかかくの嫌いなんだよ。熱血とかも苦手だし」

「現代っ子め」

なんとも涼らしい言い訳に麻穂が苦笑していると、園山から声をかけられた。

「なんだ、お前らきてたのか」

「園山先生！」

麻穂が向き直ってお辞儀をする。

涼がかつたるそうに振り返ると、大作は「じゃあな。努力は惜しむなよ」と言っただけで去って行ってしまった。

「なんだ、本当にきたんだな。真面目だなあ、吉瀬は」

そう言っただけで麻穂の顔を笑顔でなでる園山に、涼は「あたしも来てるっつーの！」とつつこみを入れた。

「どうせ吉瀬が誘ったんだろう？」

「うるせー」

凶星をさされて涼はぷいと横を向いた。

園山の案内で、英語教官専用の部屋に向かう。狭いが静かな部屋だった。英語の参考書が棚にずらりと並び、5つほど机が置いてあるだけだった。

「まあ座れよ」

「なあ、どうせ話なんてねえんだろ。早く帰してくれよ」

涼が園山にうんざりしたように言っただけで、園山はそれよりさらにうんざりしたように肩をすくめ、

「可愛いとこの様子を心配してやってるっていうのになんだよその言い草は」

と言い返す。

麻穂は一瞬きょとんとして瞬きをし、二人を見やってから小さく疑問をつぶやいた。

「いどこ？」

麻穂のつぶやきに、園山が首をかしげた。

「あら？ お前、この子に“何も”説明してないのか？」

やけに「何も」という部分を強調して言う園山。

涼は顔をそっぽ向けて、

「何も」言つてねえよ。余計なこと言うんじゃないねえ」

と釘を刺すように言った。

すると園山はにやりと唇を皿形に曲げ、麻穂に向き直る。

「私の父親とこいつの父親は兄弟なんだ。私は結婚して苗字が園山に変わったんだけど」

「そうなんですか。よく見ると、似てますね。目つきとか」

麻穂が二人を見比べて言う。

「ええ、こんな奴に似てるだなんて言うなよ……」

「おいおい、それはこっちの台詞だよ。お前みたいに目つき悪くないからな」

涼がうんざりしたように言うと、園山が負けずと言い返す。

麻穂は内心で、「道理でキャラが濃い二人だと思った」とつぶやくのであった。

園山と話があるという涼をおいて、麻穂は一人英語教室を出た。いつの間にか話し込んでしまったようで、窓からは夕暮れが確認できた。秋の日はつるべ落とし、あつという間に夕方だと麻穂は思った。

時計を確認すると5時半少し前。

麻穂はちよつと校舎を見て回ろうと思い、足を階段へ向けた。

英語教室室の上の階は図書館のようで、麻穂はその部屋に入ってみた。

この杉浦学園は私立の割りに特に設備がいいというわけでもなく、図書館もいたって普通で麻穂は少しがっかりした。

麻穂はこの学校にくる前は都内の公立校に通っていたのだが、そこという勝負だと思った。

唯一杉浦学園が勝っているとしたらその敷地面積だろう。何もかもが大きい、麻穂はそう印象を抱いていた。

中では図書委員らしき女子生徒が二名、おしゃべりに興じていた。麻穂は図書室に初めて来たので、とりあえず隅まで見て回ることにした。

大きな本棚が左右に10ずつ並び、壁沿いにも本棚が並んでいた。麻穂は自分の好きな海外文学の棚を探した。

麻穂が何気なく本棚を見ていると、突然入り口のほうが騒がしくなった。図書委員の女子がなにやら歓声をあげているようだ。

麻穂は少し気にしつつも、目の前の小説を手を取った。

「あ、これまだ読んでないやつだ……」

麻穂は少し目を通してから、きよろきよろと辺りの壁を見回してみた。貸し出し方法など書いていないものかと思ったが、あいにくそういうものはなかった。

麻穂が仕方ないなと思って本を本棚に戻したときだった。

それは突然、気配なくふってきた声だった。

「マホちゃん」

麻穂は体を強張らせた。視界は少しかげり、自分に何かが覆いかぶさっているのだと分かった。

「誰？」

麻穂は振り返らず強い口調で牽制した。

「さて、誰でしょう」

声の主は楽しそうに声をひそめた。その声は男性のもので、声がわりを既に終えているようだった。

「ふざけていると大声を出すわよ」

「ここで大声を出したところで、駆けつけるのはせいぜい受付の女子二人。僕ならそのくらいすぐに相手できちゃうけどな」

麻穂ははっと気づいて、その名前を呼んだ。

「高時祐真……?!」

麻穂が眉を寄せて訝しげに言うと、残念そうな吐息が頭の上から降ってきた。

「残念。もう少し遊んでられると思ったのにな」

おおいかぶさっていたものがなくなったので、麻穂はゆっくり振り返ると、そこにはにっこりと微笑む祐真の姿があった。

「やあ」

麻穂は素早くその身を彼から離すと、顎を引いてにらみつけた。

「私に何か用？」

「つれないね。僕が声をかけたら大抵の女の子は喜んでくれるのに」
祐真が肩をすくめる。

「女の子をなめてると痛い目にあうわよ」

麻穂はきつい目線で祐真を見つめた。

彼はそんな彼女を真顔で見つめた。

麻穂は彼の顔をじっと見つめながら、見つめ返すその瞳にいつの間にか頬が赤くなるのを感じた。確かに祐真は女の子を騒がせるだけの力はあると思う。鼻筋が通っていて、目は綺麗な二重。背も高

いし顔立ちだけで知性に富んでいると分かる。

そんな誘惑を振り払うようにして麻穂は祐真に言い放った。

「高時祐真、あなたは先生たちには受けがいいかもしれないけど、成績優秀かもしれないけど、女の子にちゃはやされるかもしれないけど、全て思い通りにいくと思ったら大間違いなんだから。昨日の夜のことだって、いずれは明るみに出るんだからね！」

麻穂が赤くした顔でそう言い放ってからしばらくして、祐真は口元だけで少し笑った。

「何がおかしいの」

「マホちゃん、転校してきたばかりなのになんで僕のことそんなに知ってるの？　まるで調べつくしたみたいだよ」

麻穂は思わず身を小さくした。そこを突かれるとは思わなかったからだ。

「どうして？」とたずねんばかりの微笑みをたたえた祐真に、麻穂は小さく、

「あなたって意地悪ね」

と悔し紛れにつぶやいた。

しばらく沈黙になると、麻穂はその視線に耐え切れず、

「何かご用？」

と問いかけた。

「いや、偶然ここで君と出会ったから、君と一緒にいるのも悪くないかなと思って」

麻穂はそんなキザな台詞を聞いて呆れた表情を露にする。

「いつもそんなこと言って回ってるの？」

「たまにだよ」

ふとその時祐真が気配を感じて麻穂から距離をとる。

図書委員の女子一人が姿を現した。

「高時くん、そろそろ図書室閉めるよ？」

恥ずかしそうにもじもじしながらそう一言告げる。麻穂のことなど眼中にはないようだ。

祐真はすぐに微笑み返した。

「分かった。ありがとう、すぐに出るよ」

麻穂はようやく解放されると思ってほっとしたが、それもつかの間、何かに手を引っ張られていた。

「マホちゃん、行くよ？」

「えっ」

麻穂が手を引っ込めようとするが、その力は強く離せない。

「離してよ！」

「一緒にきてくれるなら」

祐真の微笑みはまるで悪魔の微笑みのようだと麻穂は思った。

「わかった、わかったから」

麻穂が観念したように脱力すると、麻穂の手はするりと自由になった。

祐真のあとを、少しはなれて麻穂がついていく。

図書室を出ると祐真は麻穂の隣にポジションを移した。

「もう日も落ちたし、寮まで送るよ」

祐真の申し出を即座に断ろうとした麻穂だったが、先ほどついていくと約束してしまったばかり。ため息混じりにそれを了承した。

玄関を出るとすっかり真っ暗で、運動部はライトに照らされて部活動をしていた。

「マホちゃん、フルネームはなんて言うの？」

「吉瀬麻穂。ていうか、麻穂ちゃんって呼ぶのやめてくれない？」
「どうして？」

心底意外そうに祐真がそれを尋ねると、麻穂は言葉に詰まってしまった。

女子寮の方に二人で足を進めながら、麻穂の頭の中は混乱していた。

「だからね、私、あなたとは仲良くしたくないの。むしろそのため
にこの学園にきたようなもののな」

「麻穂ちゃん、何を言ってるかさっぱりわからないけど」

「だー！ もううるさいわねっ」

麻穂が振りかざした拳を、祐真の大きな掌が丸々包み込む。

「とにかく、私に構わないで！」

手と手が触れ合って麻穂が飛びのく。

祐真はそんなことなんでもないように、麻穂を不思議がって眺めていた。

「君って面白い子だね」

祐真は麻穂を見つめながら微笑んだ。

麻穂は反射的に顔を赤らめてしまったが、それを自覚すると顔を左右に大きく振った。

「私は全然面白くない！」

麻穂がらしくない大声を出して騒いでいると、薄闇の中から前から人がやってくるのが見えた。

麻穂がむうと祐真を睨み付けている一方で、祐真は闇に目をこらした。

そして何かを確認すると、麻穂に耳打ちした。

「君はこの路地に隠れて、隙を見て帰るんだ」

「えっ？」

聞き返す間もなく、麻穂は細い路地にその身を押し込まれた。悲鳴を上げる間もなかった。麻穂は目をぱくりさせて状況を把握しようとしていた。

祐真はしばらくその道を一人で歩き、少ししたところで足音が消えた。

「やあ、昨日ぶりだね」

祐真の声が聞こえてくる。麻穂は耳をすました。

「高時じゃねえか。一人でこんなところで何してんだよ」

「君たちがまた下らない悪さしてないか見にきたんだよ」

柄の悪そうな口調の少年の声がいくつか聞こえて、麻穂は身をすくめた。

祐真は一切それを恐れていないようだった。

「高時……一人でやるつもりか？」

「別に、それでもかまわないよ」

麻穂が何をするんだろうと思ったその瞬間だった。荷物がコンクリートの上に落ちる音がして、なかなか耳にすることのない鈍い打撃音が聞こえた。

麻穂はこっそり頭を出して祐真のほうを確認すると、祐真が3人の少年を相手に戦っていた。

少年たちの戦い方は、がむしゃらに繰り出す力技のパンチやキックだったが、祐真の戦い方はそれに比べてとても優雅だった。空手のような動きなのだろうか、と麻穂は思う。

流石に三人を相手にして苦戦しているようだったが、祐真は着実に相手の体力を削っていた。

「高時いー!!」

少年たちの咆哮が闇夜に響く。

麻穂は思わず恐怖で身をすくめた。

祐真が自分をここへ押し込んだのは、自分の身を守ってくれるためだったのだと気づき、麻穂は唇を噛んだ。

しばらくすると祐真は戦いをやめ、走って寮とは逆の方向に少年たちをひきつけた。

麻穂はそれを確認すると、そそくさと走って寮へ帰った。

寮の明かりがこんなにも心強く感じたことはない。玄関に駆け込むと、そこに丁度雪乃がいた。

「あら、吉瀬さん、ごきげんよう」

私服に着替えた彼女は、制服の時同様優雅だった。

「こ、こんばんは如月さん」

麻穂は肩で息をしながらなんとか返事をする。

その様子を見た雪乃は不思議そうに首を傾げる。

「どうかいたしました？」

「いいえ、大丈夫です」

麻穂は自分がかばんを胸に抱えていたことに気づいて、そっとそ

の腕を下ろす。

「夜は危険ですから、早くお帰りになったほうがよろしくつてよ」
「そうですね」

雪乃の言葉に、麻穂は心から同意して返事した。

下駄箱で部屋履きに履き替えて、部屋へ急ぐ。

まださつき起こったことが理解しきれずに混乱している自分がいた。むしろ、さかのぼった祐真に出会ったところからまだ把握しきれていないといってもいい。

麻穂は自室の扉をぐいっと引いた。

すると、そこにはいつものジャージ姿で雑誌を読む涼の姿があった。英語教官室で別れてから、涼のほうが先に寮に帰っていたようだ。

「涼〜！」

麻穂は思わず涼に飛びついた。

「お、おいっ！ 何だよ麻穂！？」

体を硬直させる涼。持っていた格闘技雑誌を床に投げて、麻穂の両肩をがしつと掴んだ。

「涼どうしよう、お世話になんてなりたくないのに高時祐真にかばわれちゃったかも知れない」

潤んだ瞳で見つめてくる麻穂に、涼は眉根を寄せて「ああん？」

と訊き返した。

「何が何だかさっぱりわかんねえよ」

「だから、高時祐真が一人で喧嘩してるの！ 私を逃がすために！」

涼はなんとなく事態を把握して、麻穂の目を見つめて確認した。

「分かった。お前を逃がすために、高時祐真が一人でどっかで喧嘩してるんだな」

麻穂はコクコク頷く。

「よし、あたしが様子を見てきてやるから、麻穂は寮出るんじゃないぞ」

麻穂は、立ち上がった涼の太股を掴んだ。

「でも、涼が危ない目に遭うんじゃ……」

「あたしは大丈夫。ちょっと辺りを見回ってくるから、寮長とかには何も言うなよ」

「うん……」

涼の凜々しい眼差しに思わず頷かされてしまった。

麻穂は床にへたりこんで、出かけ支度をする涼を見守っていた。

涼が忙しく扉を開けて、出て行こうとしたその時。ふと立ち止まって、麻穂に一声かけた。

「あー、麻穂。帰ったら言いたいことがあるんだ」

「言いたいこと？」

麻穂がきょとんとしてみると、涼は顔をしかめて言葉選びをする。

「今言えばいいじゃない」

「ゆっくり話したいんだよ。ま、とにかく心の準備をしてくれな！」

「う、うん」

涼は戸惑う麻穂を一人残して素早く去ってしまった。

麻穂はしばらく呆然としてから、一息ついた。

祐真に図書室で声をかけられたこと。一緒に帰ったこと。祐真が喧嘩に巻き込まれたこと。

そして、麻穂が抱える秘密。

頭が爆発しそうだった。

だがしかし、その混乱はこれから涼が招くともない爆弾の序章にしか過ぎなかった。

30分ほどして涼は帰ってきた。

麻穂は一応制服のまま待っていたが、涼からは高時らしき人は見かけなかったし喧嘩もなかったと報告を受けた。

ほっとしたような複雑な心境で麻穂がぼうつとしていると、涼は彼女の背中を叩いた。

「メシ行くぞ。着替えろよ」

「う、うん。ごめんね、ありがとう」

麻穂はぎこちなくではあったがにこりと微笑みを浮かべた。

そして麻穂が着替えだすと涼は無言でトイレの個室に入った。

やっぱり着替えは見たくないのか、と麻穂は思った。

体育で着替えを見せないことはほんの氷山の一角に過ぎず、彼女は共同の大浴場にすら足を運ばなかった。部屋に備え付けのシャワーで用を済ませ、しかもその前後の着替えも覗かせない。

「涼、着替え終わったよ」

麻穂がそう呼ぶと、涼はちよこつとだけ扉を開けて確認した後、個室から出てきた。

「早えな」

涼がドアに手をかけながらそう感想を呟く。

「だって、涼が狭い思いして待ってるんだと思うと、焦るじゃない」
麻穂は苦笑して答える。

廊下には食堂に向かう女子生徒たちが数名居たが、大半はもう食堂に行ってしまったようだった。

「なあ、麻穂って男嫌いなのか？」

「どうしてそんなこと訊くの？」

突然の涼の言葉に、麻穂は目を見開いた。

食堂のドアを開けると、中からは食べ物のおいがあふれてくる。二人はトレイを取って列に並ぶ。今夜はホイコーロー定食だそう

だ。今日は大盛りにされないように気をつけようと麻穂は決意した。
「だって麻穂、高時のこと毛嫌いしてるだろ？」

涼が振り返りながらそう言つと、麻穂は「うーん」と悩みこんでしまう。

「いや、男嫌いではなくて高時祐真だから特別いやだつていうか……でも本当は高時祐真のこともいやではないっていうか」

「なんなんだよ」

涼のツツコミが入る。麻穂は定食の味噌汁を取りながら考えていた。

（あれ？ 私高時祐真のこと嫌わなきゃいけないんだよね？ その為にこの学園にきたわけだし……でも単純に悪いやつではなさそうだし……）

「おばちゃん！二人前大盛りね」

「はいよ、涼ちゃんは元気だね」

麻穂が何か言う間もなく、涼は二人分を大盛りで頼んだ。麻穂は半分諦めに近い感情で小さくため息をついた。

二人は窓際の二人テーブルに席を取った。

こうして一緒に夕食を取るの二回目だというのに、まるで旧友のように感じられると麻穂は思っていた。それも涼ならではのフレンドリーさのおかげだろう。これからもずっと仲良くしていければいいなと麻穂は思った。

すると麻穂は涼の顔をうかがつて、その顔がちょっと憂いているのに気づいた。

「どうしたの？」

麻穂は遠慮がちに涼に尋ねる。

涼は「ん、ああ」と生返事をしてご飯をかきこんだ。

そして食べ終えてから、

「後でお前に話があるって言つたろ？」

「うん」

「それを話してから麻穂がこうやって一緒に飯食つてくれるかな

「って怖い」

「え？」

麻穂は思わず聞き返したが、涼の返事はなかった。

そんな重大なことを話されるとは思っていなかったの、麻穂は少しうつろえた。

「もう私たち友達じゃない。相当なことがなければ引いたりしないって」

冗談めかして言ったが、それに反して涼は深刻だ。

「じゃあ相当だったらどうなるわけ？」

麻穂は一瞬言葉が出なかった。

相当だったら、どうなるんだろう。自分でも言っておいてよく分からなかった。

「でも、涼はここにきて初めての友達だから、大切にしたい」

決意を込めて麻穂がそういうと、涼は薄く笑った。

「ありがとな」

二人は晩飯を食べ終わると部屋に戻った。大盛を食べきったせいで麻穂は非常に満腹だった。

重いおなかをかかえた麻穂が二段ベッドの下にその体を沈ませた時、涼は部屋のだ真ん中で腕を組んであぐらをかいていた。

「涼？」

「今心の準備をしている」

麻穂はぱちくりと瞬きを数回した。

流石にこれはふざけてはいないだろうと思い、ベッドから上半身を起こした。

「ねえ、涼？　言うのがいやなことなら無理して言うことはないんだよ」

麻穂がそつと涼に語りかける。

涼は一瞬その誘惑に負けそうになったが、ぎゅつと唇を噛んだ。

「いや、あたしの為だけじゃなくて、麻穂のためにこそ言っておくべきだと思うんだ」

「私の為に？」

「ああ」

麻穂はあぐらをかく涼の前にぺたんと膝を曲げて座り込んだ。

「男嫌いじゃないんだよな？」

涼が先ほどと同じことを聞いてくる。

「そうだよ。前の学校だって共学だったし」

麻穂と涼はしばらく見詰め合った。というより麻穂は目がそらせなかった。涼のこんなに真剣な顔を初めて見たからだ。

涼はドアの鍵がかかっているのを見て確認した。そして麻穂にクツションを渡した。

「何これ？」

「叫ぶときはそれに叫べ。響くと迷惑だから」

「叫ぶって……」

麻穂が苦笑いを浮かべるも、涼はいたって真剣な面持ちだった。

「あとひとつだけ約束してほしいことがある。絶対にこのことは内密にしてくれ」

麻穂がきょとんとしていると、「いいか？」と念を押される。

「うん、約束する」

涼の真剣さに応えたくて麻穂は小指を立てた。

「何それ？」

「いや、指きりげんまんしようかなって思ってた……」

表情を凍らせる涼。麻穂は本気だった。自分の小指を強引に涼の小指に絡ませて、お決まりの歌を歌いだした。涼はもうどうにでもなれとばかりに投げやりだったが、麻穂の真剣な眼差しに少し胸を打たれたようで、その眼差しは優しくかった。

一連の儀式を終えると、涼は「さてと」と一呼吸おいた。

廊下を歩く女子生徒の声が聞こえて、涼はまたドアに鍵がかかっているか確認をする。

「いいか？」

「いつでもどうぞ」

麻穂がそういうと、涼はおもむろにジャージの上を脱ぎ始めた。

「え？ え？」

人前で肌をさらさない涼が今服を目の前で脱いでいる。麻穂は事態が把握できなくて拳動不審になっていた。

そうして涼は肌着一枚になった。胸の膨らみは自分より大きいなと麻穂は勝手に考える。

さらに涼はその肌着にすら手をかけた。

「涼、無理して脱がなくなつて……」

麻穂はどうすることもできなくてそう言ったが、涼は話を聞いていないようだ。

ブラジャー一枚になった涼の体を見て、麻穂はふと違和感を覚えた。

（あれ？）

口に出しては失礼かと思い黙っていたが、涼はさらにブラジャーにまで手をかける。

麻穂は思わず両手で顔を覆ってしまうが、涼は「見てよ」と催促する。

麻穂は自分の指の間からそっと涼のほうを見る。あぐらをかいて上半身が肌色の涼。その肩は妙にがっしりして骨ばっている。思えば首も女子にしては太い方だ。腕は細いが筋肉質。胸は、なかった。「胸が、ない？」

麻穂は一瞬どういうことが分からなくて瞳をぱちくりとさせていた。

先程ふくらみがあった場所はまったくいらになっている。

そこで涼が口を開く。

「実は男なんだ、俺」

麻穂は目を見開いた。不安げな眼差しで見つめ返してくる涼の推測に反して、叫ぶ気にはならなかった。

とにかく情報処理をしようと精一杯で、麻穂は固まってしまった。「やっぱフリーズするよなあ」

涼はそう言うと、腕につけていた輪ゴムで髪の毛を一本に高く束ねる。

「ほら、こうしてみると男に見えるだろ？」

長い髪がなくなると、確かに男に見えた。涼は女顔な方なのだろう。

「おい、麻穂。戻ってこーい」

涼が呆然とする麻穂の目の前に手をひらひらとかざして見せる。

麻穂は、指さしてたずねた。

「む、胸は？」

「ああ、ブラジャーにパット入れまくってごまかしてる」

さらりと言つてのける涼。床に転がるブラジャーを指差した。

麻穂は目の前の女性、もとい男性が、一晚寝食をとみにした相手とは思えなかった。でも、ここで引いたら涼との約束を破ることになる。義理堅い麻穂は必死に耐えた。

「トイレは？」

「女子は全部個室じゃん」

「お風呂は？」

「俺は部屋付のシャワーだけ浴びてるよ」

麻穂は思いつく限りの疑問をぶつけたが、すっきり出来なかった。色々疑問に思うだろうけど聞いてくれよ、そもそもお前のおじいちゃんである理事長が提案してきたことなんだ」

「おじいちゃんは知ってるのね？」

「知ってるも何も、そいつに言われて俺は女装してるんだぜ？」

そう言つて肩をすくめる涼。

麻穂はなんとか目の前の男性の存在を認め、再び尋ねた。

「どうして女装してるの？」

涼は真面目に説明した。

「杉浦学園は全寮制だろ？ 中等部女子寮の風紀が一時期酷く乱れたことがあったんだ。その代の寮長の手にも負えなくて。つーわけで、それからは女子ではなく男子のいわばスパイを寮に送り込むこ

とになったんだ」

麻穂はそのあまりに非現実的な解決案に少し首を傾げたが、自分の祖父ならやりかねないなと思った。

「なんで涼が選ばれたの？」

「新しいスパイを探してるとき、園山センセにその話が回ってきて、いとこの俺が丁度いい年齢だつてことで薦められた。学費・寮費諸々タダになるってことだったからな。うち、実家結構ビンボーだし」

涼はそう言うと、肌寒いのか上にジャージをはおった。こうしてみると本当に男の子だなと麻穂は感心してしまう。

「だからこの部屋は相部屋を受け付けてなかったのね」

「そ。だから麻穂が最初に来たときはほんとにびびったぜ。理事長に聞きに行ったら、孫だから手を出すなよって言われるだけだしよ」

麻穂が一瞬身の危機を感じて体を竦ませるが、涼は「何もしねえよ」と両手をあげた。

「私もこの学園に入りたいてって言ったとき、『いわくつきの部屋』でいいなら入れてやるって言われたの。こういうことだったのね」

「いわくつきって……あのジジイ言いたいこと言ってくれんな」

涼は今にも理事長に抗議しにいきそうだったので、麻穂は必死に話題を変えた。

「涼は私がくるまではずっと一人部屋だったんだ？」

涼は「そうだよ」とそっけなく答える。

「麻穂は、俺と一緒に部屋でやっていけるの？」

涼が突然、核心を突くような質問をぶつけてくる。

麻穂は思わず言葉を失った。

「俺は構わないけど、麻穂がいやって言うなら。部屋を変えることは出来ないみたいだからこの学園を出て行くしかなさそうだけど」

冷静すぎてあまりに冷たい言葉に麻穂は唇を噛んだ。

涼は目を細めて麻穂を見つめている。

「……あのね、私は目的があつてこの学園にきたの」

「言つてたな」

「それを果たすまでは悪いけどここを出て行くことはできない」

麻穂の視線が涼の視線とぶつかる。意思の強い二つの瞳がぶつかり合った。

「目的って何なのさ？ 俺もこれだけ話したんだから、聞く権利あると思うんだけど」

麻穂は理事長である麻穂の祖父がわざわざこの部屋に自分を置いた理由を考えてみた。男と同室になんてされたら嫌ですぐに飛び帰ってくるだろうと思っていたのだろう。それに少なくとも学園のスパイだったら自分側の人間、味方につけられると思っているのかも。涼が自分の味方についてくれる保障などない。しかし話してみないことには味方になってくれるかもわからない。

「私の味方になってくれる？」

麻穂はだめで元々で聞いてみた。

「俺をどうしても味方にしたかったら脅せばいいじゃねえか。男だつて寮の皆にはばらすぞつて」

「私はそんなことしたくない」

麻穂はキツパリとそういった。

涼はそれを聞いてニット口元に微笑みを浮かべた。

「ふうん。中立にくらいはなるって保障してやるよ」

麻穂はこの人に話そうと決意を固めた。

「あのね、私には不本意ながら婚約者が決められてるの」
「婚約者？」

涼が眉根を寄せる。

「このご時世にそんな言葉使われるんだな」

「私も自分で言つててそう思う」

麻穂は苦笑いしてそう答えた。

「で、相手は？」

「高時祐真」

麻穂がさりとそう答えると、涼の動きが止まった。

「高時い？」

麻穂は涼を見上げてコクリと頷いた。

「おじいちゃんが勝手に決めてるんだけどね。杉浦学園に私と同じ年で学年一優秀な男がいて、生徒会長と寮長もやってるって。その人が高時祐真なんだけど、おじいちゃんがひどく気に入っちゃって相手方も了承してるらしいの」

それを聞いた涼は、

「そんなもん口約束だろ？ 踏み倒しちまえよ」
とワイルドな意見を口にする。

麻穂は首を横に振った。

「うつん。私の母も、祖父の息子である父と学生の頃から婚約者として結ばれててそのまま結婚したの。ゆくゆくは杉浦家を継ぐ人間につて」

「麻穂は一人っ子なのか？」

麻穂は首を縦に振る。

あちゃー、と涼は額に手をつく。

「だからね、私はその高時祐真の婚約者にふさわしくない点を見つけるためにこの学園に入り込んだの。おじいちゃんも、どうしようもない欠点が見つかれば婚約解消を認めてくれると思って」

「高時のあら探しか。おもしれえな」

涼は悪戯に笑う。麻穂はふうとため息をつく。

「潜入二日目でなんとか接触できたけど、あんなナンパ野郎絶対に嫌！」

高時のことになると声を張る麻穂を、珍しそうに眺めながら涼は言う。

「でも、その高時に今日は助けてもらっただろ？」

「かなり不覚なんだよね。そもそも高時祐真が一緒についてきたりするから……」

麻穂がぶつぶつと祐真への不満を言い出す。

涼はまた訊いてみた。

「高時は麻穂が婚約者だって気づいてないのか？」

「理事長の娘としか聞いてないみたい」

「ふうん。お前、気に入られちゃったんじゃない？」

「なんで?!」

おかしそくに笑う涼に麻穂は食いついた。

「だって、あのモテ男高時祐真が寮まで送ってくれるなんてさ」

涼は思ったことを素直に口にした。

「どうせ誰にだってそうしてるのよ」

麻穂はふんとそっぽを向く。

「なんでそんな意識して高時を嫌おうとするのさ？ 婚約者なんだから好きになっちまえば早いだろ？」

涼の言葉に、麻穂は尋ね返した。

「涼は恋したことないの？ 私は自分で選んだ相手を自分で好きになりたい」

麻穂の真剣な眼差しに、涼は真顔で「恋ねえ」とつぶやく。

「俺は中学からずっと女の子やってるから、恋はしようがねえからな。小学生の頃なんてガキだったし」

語る涼の前で、麻穂は今更になって言う。

「あのさ、やっぱり服着てもらえないかな？ こっちが目のやりどころに困るって言うか」

「ああ、悪い」

ジャージの間から覗く筋肉は確かに男性のもので、麻穂は目のやり場に困ってしまったようだ。

「とにかくさ、お互いの秘密も分かち合ったわけだし、これからも仲良くしようぜ」

着替え終わると、髪をほどいて麻穂に右手を差し出した。

こうやって見ると髪の毛の長い普通の女の子。しかしよく見ると、骨ばった手や太い首筋が分かる男の子。

自分のおかれている状況も相当大変だと思っていたが、涼もなか

なか大変なところに身をおいているんだなと麻穂は思った。

そして涼の手を握った。

涼の手は大きくて温かった。

「よろしく、お願いします」

「よろしくな。隠し事してねえと楽でいいや」

涼はニツと笑った。

それを見届けてから、麻穂は自分のベッドにもぐりこんだ。

「あー」

麻穂は気の抜けた声をあげる。

「おいおい、早速何だよ。らしくねえな。また高時か？」

涼は自分の椅子に座って、バックの中身を整理しながら返事した。

「うん」

布団に顔をうずめているのかくぐもった返事が返される。

「涼お姉様が聞いてあげるぜ」

「お兄様でしょ」

ふざけている涼に麻穂は飛び起きて一喝した。

そしてまたしゅんとなり、悩みを吐き出した。

「やっぱりさあ、高時祐真にお礼を言うべきだよね……いくら嫌な

奴でもかばってくれたわけだし」

「麻穂はとことんいい奴だな。気にするこたねえよ。喧嘩はこの年

の男にとっては仕事みたいなもんだし」

涼はいつも通り親切だが投げやりな口調で喋りだす。

麻穂は涼の言葉も考えたが、やはりお礼を言おうと決心したよう

だった。

「やっぱり私、筋は通すところは通さないとダメだと思う。お礼は

言う。で、それから悪いところを探す！」

「頑張れよ。応援だけはしてるぜ」

涼のひねくれた言葉にも麻穂は「うん」と頷いて決意するのであった。

翌日。

学園は雨に包まれていた。季節は秋、一雨ごとに寒さを増していくようだった。

麻穂は寝坊している涼をたたき起こしてから急いで食堂へ向かい、朝一番の早さで一人寮を出た。

一日で覚えた通学路を一人向かう。寮と学校はそんなに遠くはないのだ。今頃涼は寝ぼけながら着替えてるところだろうと考えて苦笑した。おいてきてよかったのかな、と。

でも今日は祐真に話をしたかったから、朝一で学校に向かっていくのだ。

祐真は生徒会業務で部活には参加してないとの涼からの情報を得ていたので、このくらいの時間に校門で待っていれば、祐真が早起きでも会えるだろうと思ってやってきた。

雨は少し霧雨のように変わり、勢いを弱めている。

麻穂は傘を差して校門の前で待っていた。

登校する生徒が増えてきて、雪乃も登校してきた。何をしているのか不審がられたが、涼を待っているのだと言い訳して難を逃れた。時折現れるクラスメイトとも適度に挨拶を交わし、ついに目的の人は現れた。

傘を差してまっすぐ歩いてくる祐真。麻穂は足を踏み出す。

「高時……」

「祐真くん！」

その時麻穂の横から、麻穂より背の高い派手な色の傘を持った女子生徒が現れて、麻穂を追い抜いて祐真に挨拶をした。

「祐真くんおはよう」

「おはよう」

麻穂はその場に立ち尽くしたが、一瞬祐真の視線がこちらに来たのを見逃さなかった。確実にこの人は今私がここにいるということを知っている、麻穂はそう確信した。

「祐真くんと一緒になれちゃうなんてラッキー！　いつもこの時間

なの？」

「いつもはもう少し早いかな。生徒会の仕事があるから」

女子生徒は祐真の横にぴったりつくと、立ち尽くす麻穂に視線をやった。

「……知り合い？」

祐真の顔を見つめて女子生徒が尋ねると、祐真は首をかしげた。

「そういえば、昨日図書室で会った子に似てるな」

麻穂は祐真の態度に目を見開いた。薄い微笑みを浮かべる祐真と視線は交わらない。

二人の間に女子生徒が割って入った。麻穂は思わず彼女を見上げる。

「ちょっと、一回会ったくらいで知り合い面するなんておかしいんじゃないの？ 祐真くんだって迷惑だよ」

麻穂は力チンときて口を開く。

「私は昨日この人と……」

「うん、迷惑だね」

その言葉をさえぎるようにして祐真が女子生徒の言葉を肯定する。

麻穂は目を見開いた。

「ほらあ、何組の子か知らないけど、まわりつかないでよね」

女子生徒と祐真が並んで校舎へ去っていく。

麻穂は傘を持っていないほうの手で拳を作った。

祐真に近づきたくないはずの自分が祐真にまわりつく人間だと勘違いされた屈辱。

祐真に他人のふりをされた悔しさ。

それに勝る理由の分からない悲しさが麻穂を支配していた。

麻穂が下を向いてしばらく立ち尽くしていると、後ろから能天気な涼の声が聞こえてきた。

「はよー。って麻穂、こんな所で何してんだよ」

麻穂が顔をあげて涼を見つめると、涼は急にぎょっとした。

「どうしたんだよ、腹でもいてえのか?!」

拳動不審になる涼を呆然と見つめて、麻穂は自分の頬に手をやってみた。

「あれ、涙だ……おかしいな、ム力いてるはずなのに」
涙声になる麻穂に、涼は腫れ物に触るように接する。

「なんだ？ 何があっただんだ？」

「なんでもないんだけど……ホントに大したことじゃないんだけど……」

麻穂は鼻をすすりながら辛うじて言葉をつむぐ。

そこに教師が現れて、遅刻しそうな生徒たちを叱咤する。

「コラア！ お前ら遅刻するぞー！」

「うつせえ！ 今それどこじゃねーんだよ！」

涼は麻穂の顔を覗き込みつつ、教師に怒鳴りつける。

「大丈夫、早く教室行かなきゃ」

「麻穂がよくてもあたしがよくねえよ」

涼は怒鳴り返されて驚いている教師を横目に、傘を持たない手を麻穂の肩においた。麻穂は一瞬まるで抱き寄せられたような錯覚がして緊張したが、涼は何の気もないようだった。

麻穂は涙を拭って涼を見つめ返した。

「ム力ついてんだろ？ 話してみろよ」

涼が麻穂に迫ったときだった。

「こんなところでイチャついてんじゃないよ」

力強い容赦のない拳が涼のみぞおちに下される。

「なっ」

完全に予測外の攻撃だったせいか、涼はまともにそれを食らってしまい、バランスを崩してふらついた。思わず傘が手から滑り落ちる。

「涼！」

麻穂が慌てて涼の背中を撫でてやる。

「園山あ！ 何しやる！」

そう、その攻撃の主は涼の予想通り担任・園山みことだった。

恐らく生徒指導で応援として校門にかり出されただろう。

「園山先生、おはようございます……」

園山の過激な登場シーンに若干引いた麻穂は、とりあえず挨拶だけはと口を開いた。

「おはよう、このバカップル」

涼が園山を見つめてチツと舌打ちするのと、麻穂が頬を赤くさせるのは同じくらいのタイミングだった。

園山は麻穂の反応を見てにいつと笑った。それを涼も確認して、困ったように目を細めた。

「いやだなあ園山センセイ。あたしたちは女の子同士ですよ」

「そうだな、悪い悪い」

涼の演技ぶった振る舞いに、一切悪びれた様子を見せずに園山が返す。

恐らく園山は麻穂のこの反応を見て、涼が自分の本当の性別を麻穂に話したのか確認したのだろう。とすると、昨日麻穂に涼がこの話題を話すに至った経緯には、園山の後押しがあるとみて間違いないうだった。

先程まで涼に気圧されていた教師が口を挟む。

「園山先生、助かりましたよ。片岡のやつ、俺の言うことじゃ聞きやしないんだ」

「いつでも呼んでください」

曇りのない爽やかな笑みで園山が応える。

麻穂が園山が教師間ではそういう顔をしているのかと感心してしまった。

「マジ腹いてえ。朝のクロワッサン全部出るわ」

「おら、早く教室行け。私はちょっと遅れるから、朝のホームルーム勝手にやっつけて日直に言っつけ」

腹をさす涼の心配など一切せず、園山は二人を校舎へ導く。

そこで男性教師が仕返しとばかりに言う。

「片岡、お前美人さんなんだから、ちょっと大人しくしてればモテ

るぞ」

「余計なお世話だ！」

涼は一喝してから、麻穂の手を引いた。

麻穂は思わずその手をまじまじと見つめてしまう。

校門からしばらくまっすぐ進み、校舎へたどりつく。突っ切った

校庭は泥だらけで使い物にならなそうだった。

麻穂がいつまでもそのつながった手と手を見つめていると、涼が振り返る。

「どうした？」

「いや、なんでもないんだけど……」

あまりにもスムーズに手をとるものだから、さもそれが当たり前のように感じてしまっていたが、涼は麻穂の視線の先をたどるとすばやく手を離れた。

「わりい」

麻穂は自分の手のひらや指先に残る温もりを感じて、心臓の高鳴りを覚えた。涼が男の子だということを改めて意識させられる。

「あ、園山先生以外の先生って、涼の性別のこと知ってるのって？」

「ちらほら居るよ」

先程校門にいたあの男性教師は恐らく涼の性別を知らないんだろうなと麻穂は内心苦笑した。

涼が美人に見えてしまうのは麻穂にも分かる。麻穂も涼が男だと知らなかったときに彼に美人だと一生懸命言っていたのだから。肌が白いのもあるだろうけど、それ以上に男らしさからくる凛々しさがある。

二人はそれぞれ傘を畳んだ。

麻穂の今朝の話を聞いた涼が行動を起こすのは、その昼のことだった。

涼は、昼休みに中庭にある自販機前のベンチであの男を待っていた。ベンチに腰掛け腕と脚を組んで、その表情は静かに怒りに燃えていた。

やみたての雨が残していった水溜りが涼の横顔を映す。

そこに、一人の男が現れる。

「ごめんね、待ったかな？」

長身な涼と同じくらいの身長的好青年、高時祐真だった。

涼は高時が現れたのを見つけると、すぐに腰をあげて彼の目の前に仁王立ちになる。

「片岡 涼さんだったよね？ 3年2組の。僕に用ってクラスメイトから伝言を聞いたけど、何かな？」

祐真は涼を目の前にしても戸惑った様子でもなく、冷静に言葉を紡いでいた。

そこに涼が一喝する。

「あたしはてめえと馴れ合いするために呼び出したわけじゃねえ」
祐真は少し驚いたように眉根を寄せた。

「すごい口調だね、いつもそんな喋り方なの？」

涼は祐真の言葉をなぎ払って自分の話を続けた。

「余計なお喋りしてんじゃねえよ。今朝てめえがしたこと、覚えてんだろうな？」

自分が何を言っても無視されると悟ったのか、祐真は小さく肩をすくめた。

「さあ。なんだろうね。僕と君が話すのは今日が初めてじゃないかい？」

涼はその“僕”だの“君”だのキザったらしい言葉の持つ気持ち悪い響きに鳥肌が立ちそうだった。

祐真を睨み付けると、言葉を続ける。

「あたしじゃなくて、他の女子生徒に酷い扱いをしたろ？」

涼が問い詰めると、祐真は唇を皿型に曲げて笑んだ。

「僕の周りには結構女の子が居てね。よく覚えていないや」

その言葉に涼は思わず激昂しそうになる。なんとか己を抑えたのは、こんなくだらない男にキレてどうするという思いだった。

「あたしのルームメイトの吉瀬 麻穂が昨日でめえに世話になったらしいな。それをお礼に行ったら他人のふりをされたって言うてるが、どういうことだ？」

「ああ、麻穂ちゃんか」

涼が柳眉を逆立てて言うが、祐真は相変わらず涼しい顔だ。

涼は祐真が「麻穂ちゃん」と呼んでいることに反射的に「気持ち悪い」といいそうになってしまったが、飲み込んだ。

「でも、これって僕と麻穂ちゃんの問題であって涼ちゃんは関係ないことだよな？」

「涼ちゃん……?!」

涼は思わずその場で青ざめた。先ほど「気持ち悪い」と告げておけばよかったかと心の底から公開した。クラスメイトですらよばない恥ずかしい呼ばれ方をして、涼は怒りに拳を震わせた。

「おい、二度とその口でそんな呼び方するんじゃないぞ」

「恥ずかしがりやだね。可愛い名前なのに」

祐真がにつこりと微笑むと、涼はいよいよ何かが切れそうになるのを必死に抑えた。

「涼ちゃんは麻穂ちゃんとはルームメイトなんだ、それは仲良しのはずだよな」

「歯ア食いしばれ！」

涼はその拳を祐真に振り上げる。

しかし祐真はその拳を手のひらで受け止めてしまった。

涼が思わず「やりすぎたな」と我に帰る。

祐真は笑っていたが少し困ったような表情をしていた。

「びつくりしたなあ、女の子から殴られそうになるとは思わなかつ

たよ」

「て、てめえが気持ち悪いことばっか言ってるからだろ」

涼は戸惑いながら返す。涼が拳で感じたことは、祐真は相当喧嘩になれているだろうということだった。そして今の思わず放った一撃により、男だということがばれないかというのが心配だった。拳を作れば、固い手はさらに固くなる。

「次にそう呼んだら次は一発じゃ済まねえからな」

内心ドキドキしながらも、涼は強気にそう言い放った。

「分かったよ、”片岡さん”」

祐真はそれを強調するように強く呼んだ。

「それと、麻穂のことは、麻穂が許してもあたしが許せねえ」

涼はキツと祐真をにらみつけた。

「そうだね……麻穂ちゃん泣いてた？」

何も感じていなさそうな瞳が、何気なく涼にたずねる。

「ご期待通り泣いてたよ。何でもてめえの思い通りか」

「思い通りってことはないけど、素直で可愛いね、麻穂ちゃんって」

涼は心の底から「麻穂はこんな奴と婚約すべきではない」と思っ

た。そして口を開く。

「分かったよ。てめえなんかに謝れって言ったあたしが馬鹿だった」

そして涼はビシッと祐真を指差す。

「金輪際麻穂に近づくな」

祐真は肩をすくめた。

「おやおや、怖いね。近づいたら片岡さんが飛んできて殴られでもするのかな？」

「あたしは本気で言ってるんだ。いいな？」

釘を刺す涼。祐真は仕方なさそうに、

「分かったよ」

と了承する。

涼がその場から足早に去ろうとするのを呼び止めて、祐真は一言添えた。

「麻穂ちゃんによろしく」

「誰が伝えるか」

涼はぶつきらぼくに言い放ち、その場を去った。
曇りきつた空から、ようやく太陽が覗いた時のことだった。

放課後、涼と麻穂は帰路についていた。

「ごめんね、涼。わざわざ私の敵討ちみたいなことさせちゃって…」

「いいんだよ、あたしが勝手にやったようなもんだし」

朝使った傘は畳まれて杖の代わりになっている。

夕日は二人の背中を照らしていた。

「にしてもお前はほんつとやな奴を婚約者にさせられたもんだな」

涼がため息混じりに哀れみの言葉を口にする。

「ホントにね」

麻穂は自嘲するようにそう言った。

「でも涼がそうやって私のために一生懸命になってくれて嬉しいよ。
ありがとね」

「あの男のやり方が気に食わなかったただだよ」

そっか、と頭をかく麻穂。

涼はその麻穂の言葉が素直に受け入れられなかった自分を思い、
少し反省していたのは彼の心の中だけの秘密だ。

下校する女子生徒たちが多数、同じ方向へ向かって歩いていく。
そう、中等部の寮のある方向へ向かって。

そのうちの一人の女子生徒が、涼の背中を叩く。

「涼！」

涼は振り向いて彼女を見下ろした。

「みさき。何だ？」

みさきと呼ばれた背の低い少女はにやにやと口元に笑みを浮かべていた。

涼が不審がつて彼女の頭を二発ほど軽く叩く。

「なんだよ、気持ちわりいな」

みさきは麻穂に目もくれず、涼を意味深長に見つめてこう言った。
「興味ないふりして、やる時はなかなかやるじゃない」

涼はいよいよ意味が分からなくなつて彼女に顔を寄せた。

「おい、あたしにも分かるように説明しろよ」

「またまたあ、本人が一番分かつてるんじゃないの？」

まだ言葉を選ぶみさきに、涼はまるでやくざのようなを形相で睨み付ける。

「怒らないでよ、もう。今日のお昼休みに、高時くんを中庭に呼び出したんでしょ！」

「はあ？」

涼は何を言っているのか分からないとばかりに首を傾げた。

麻穂は涼の顔を見上げた。

みさきはにっこり微笑んで話を続ける。

「うちの3年2組と、高時くんの3組じゃもう話題だよ。あの片岡涼がようやく恋に目覚めたと思ったら、その相手は学校のリーダー高時 祐真なんだもん！」

涼は眉間にしわを寄せた。

麻穂は何も言えずにまばたきをしている。

二人の空気が完全に止まったのを感じ取って、みさきは訝しげに言葉を発する。

「どしたの……？」

麻穂はふと我に返って涼の腕をゆすった。

「涼！」

「ああん？ 馬鹿野郎、そんな妄想どこで聞いてきた？！」

すぐにスイッチが入った涼は、いつもの調子でみさきをまくしたてた。

「どこでって、皆知ってるよ。男子も知ってるんじゃないかな」

「そんなあ……」

麻穂が口元に手をやって小さな悲鳴をあげる。

涼は力んで主張した。

「いいか、あたしはあんなキモイ男願い下げだからな！ 誤解してるやつがいたら言っとけ！」

それを聞くと、みさきは残念そうに口を尖らせた。

「ええー、じゃあガセなんだ。残念っ」

「残念っ、じゃねえよ。あたしも高時でも否定するっつーの！」

「でもこういうのって否定すればするほど誤解って広がるもんだよね」

にこやかにそう言うってのけるみさきに、涼はもう一度鬼の形相で睨み付けた。

三人が寮に帰ると、その噂が広まっていることが理解できた。

ただでさえ人気者の涼は、いたるところで友達に話しかけられ、その話題を振られては火消しに必死になるのだった。その噂の勢いといったら、食堂のおばちゃんにまで冷やかされるレベルだった。

涼は食堂から帰ると部屋のシャワーを浴びて、大浴場へ行った麻穂の帰りを待っていた。

塗れた髪をそのままに、腕と脚を組んでじっと考え込んでいた。

「屈辱だ」

声に出してみると尚更悔しくて、涼は空中に拳を突き出した。

（俺は男だぞ？ 男と噂になって嬉しいことなんて一つもねえよ！）

あの時拳を繰り出した勢いで殴り合いの喧嘩でもしてくればよかったと、涼は舌打ちした。

「ホモじゃねえんだから」

「ただいまー」

涼がつぶやくのと同時に、麻穂が部屋に入ってきた。湯上りしたてで頬は赤くなっている。

「ホモがどうしたの？」

苦笑いながら麻穂が尋ねると、涼は「なんでもねーよ」と言っただけ濡れた長い髪に手ぐしを通し出した。

麻穂は涼のその仕草を見つめながら、自分の椅子に座った。

「ねえ、髪いつから伸ばしてるの？」

「小5かな。この仕事が決まってから伸ばして始めて、実に五年も伸ばしてることになる」

「髪、長くてきれいだよな」

麻穂はそう言って微笑んだ。

涼はそっぽを向いて、

「嬉しくねー」

と拗ねてみせたが、顔が少し赤かった。

そんなことには気づかずに、麻穂が話を変える。

「今日は変な誤解が生まれたね……。涼が私のために怒ってくれてそうになった結果だから、私も噂を消すのに尽力するから！」

涼は虚空を見つめながら髪を触っていたが、噂のことを思い出したのか表情を険しくした。

「ああ、頼むよ。あいつとあんな誤解されたままじゃ、俺の人生最大の屈辱だ」

涼は部屋の中だと自分を俺と呼ぶ。切り替えをしていようだ。風呂上がりでも相変わらず偽の乳を形成するブラジャーをはずしていなかったが、心はリラックスして男に戻っているのだろう。

麻穂はそんな涼を見るとたまに男の子らしく見える瞬間があるのだ。その時は一瞬どきっとする。最初に涼が女の子として過ごしたその印象が強くて、涼を男の子ではなく女の子としてみている自分がいるので、そのギャップに違和感を覚えているのだらうと麻穂は考えていた。

涼は自分の右手を見つめる。祐真に殴りかかったこの右手。ぎゅっと握り締める。

「あの野郎、殴ってやればよかった」

それからしばらく経った。

その噂はどうなったかというところ。

「どういふことだよ」

涼は静かに怒りに燃えていた。

「なんで一向に噂が消えねえんだよ！」

まあまあとなだめる麻穂の話も聞かずに、教室の椅子に座る涼は貧乏ゆすりを続ける。

「何かの陰謀としか思えん」

じいっと虚空を睨む涼。麻穂は頬を掻いて辺りを見回した。

放課後になって随分人が減っていたが、部活動の準備をする者や意味もなく残っている者たちが教室を賑わせていた。

窓から覗く景色は夕暮れ。

麻穂が涼に帰ろうと促そうとした時だった。

「ごきげんよう」

帰り支度を済ませた如月雪乃が二人の傍を通り抜けていく。

「寮長、じゃあな」

「如月さん、また」

涼ががさつに手を振ると、雪乃が目を細めて微笑んだ。

「あまり下品な振る舞いをしていると、彼氏に嫌われますことよ」

涼がぴきつと切れる音が、麻穂には聞こえたような気がした。

麻穂が止める間もなく涼は椅子から立ち上がり、雪乃の胸倉を掴まん勢いで詰め寄った。

「おい、誰が彼氏だ！ 高時のことか？！」

雪乃は困ったように眉をひそめて尋ね返した。

「違いますの？」

「違いますわ！」

「涼、口調が移ってる……」

涼の絶叫に麻穂がつっこむ。騒がしくするものだから周りの生徒たちが少し視線をこちらに向けている。

雪乃は小さく口をとがらせた。

「けれどわたくし、確かな筋から聞きましたのよ」

「確かな筋って何だよ」

涼が雪乃を見下ろす。

「何って、高時くん本人ですけど」

麻穂は「えっ」と言葉を漏らしたが、涼は何を言うこともなく眉間にしわを寄せた。

「涼、それってどういうことだろう……」

麻穂が涼に尋ねると、涼はフンと鼻を鳴らした。

「簡単なことだ。あいつがガセを広めてるってことだろ」

「あら、ガセですよ」

「ガセだよ！ 今の流れで分かるだろ！」

がっかりする雪乃に涼がつっこみを入れる。

「片岡さんも恋人が出来れば少しはお淑やかになると思いましたのに」

雪乃に本当に残念そうに言われて、返す言葉がない涼。麻穂も苦笑いだ。

「そうときまったら高時のところに行くぜ。麻穂はここで待ってる」

涼が麻穂に言い放ったが、麻穂は涼に「待って！」と声をかけた。

「なんだよ、麻穂」

「今、涼が高時祐真の所に行ったら噂を変に助長しちゃうんじゃないかしら」

そう言われて涼は、確かにそうだとばかりに唇を一本に引いた。

「私が行くよ、高時祐真に誤解を解くように言ってみる」

「ちよつと待てよ、それじゃあ……」

涼が麻穂を制止する。

涼は祐真に二度と関わるなと言った。それを自分から破るような真似をしていいものか迷っていた。

「それじゃあ何？」

何も知らない麻穂がきょとんとして尋ねる。

涼はしばらく言葉を選ぶのに沈黙してから、尋ね返した。

「高時に会ったの、嫌じゃないのか？」

麻穂は涼の疑問を受け止めて、笑顔で返した。

「何言ってるのよ、あんな男のことなんてもう何も気にしてないよ」

「なんのことですか？」

そこで雪乃が口をはさんだが、二人はそれを黙殺した。

「悪いな、じゃあ頼む」

涼が申し訳なさそうに両手を合わせるのを見て、麻穂はにっこり笑った。

そして机に荷物を置いたまま教室を出ていった。

「ちよつと、吉瀬さんと高時くんはお知り合いですの？」

「他人だよ、他人」

面倒くさそうに涼が雪乃の質問に答える。

気丈に振舞っていたが、麻穂は本当に大丈夫なのだろうかと今更ながら不安になってきて、今すぐ駆け出したい気持ちになる。しかしそれは、麻穂のせつかくの思いやりを無駄にしてしまうことだと分かっていたので、踏みとどまれた。

麻穂はとなりの祐真の教室を尋ねた。

人はわずかしきおらず、その中に彼はいなかった。

祐真が生徒会長をやっていることを思い出して、今度は生徒会室に向かうことにした。

廊下を歩きながら、心臓がどきどきしているのを感じていた。

祐真を意識しているわけじゃない、あれから久しぶりに話すから緊張しているだけ。麻穂はそう思うようにしていた。

生徒会室は職員室の隣にある。麻穂は転校して間もないが、職員室を何度か尋ねていたのだから覚えていた。

麻穂が生徒会室の扉をノックすると、中から男性の声が聞こえた。

「失礼します」

麻穂がそつと覗きこむように扉を開けると、中には祐真が一人いるだけだった。

麻穂のことを確認すると、その謎めいた瞳でにっこり微笑んだ。

「やあ、麻穂ちゃん」

久々にその呼び方で呼ばれて、麻穂は口をへの字に曲げる。

「その呼び方やめて」

「片岡さんには殴られかけたけど、君はそこまでしないんだね」

おかしそつに言う祐真の言葉の意味がよくわからず、麻穂は小首をかしげた。

祐真は言葉を続ける。

「久しぶりだね。会いたかったよ」

そう言われて麻穂は一步後ずさった。

「気持ち悪いこと言わないで。私は全然会いたくなかったわ」

ははは、と笑う祐真は、麻穂に拒否されても全く気にしていないようだった。

「で、今日は何の用かな？」

祐真が仕切り直すと、麻穂は口を開いた。

「涼のことだけ。恋人だってほら吹いてるって本当？」

そう言われると祐真は目を細めて笑った。

「ほらを吹く、ってすごい表現をするね」

「私は真剣よ。答えて」

麻穂が牽制すると祐真は肩をすくめた。

「何人かにそう言ったかもね」

「なんでそんな嘘をつくの？」

「片岡さんって素敵じゃないか。付き合えたらいいなと思って」

麻穂はそれを聞いて、思わず引いてしまう。涼の正体が男だと分かっている麻穂だからこそなのだけれど、祐真は不思議そつに尋ねる。

「なんであんなにいい子に彼氏がないんだろうね」

「涼は迷惑してる。勝手に嘘を言いふらすのやめて」

「そうだね、迷惑だと思うよ」

祐真がそれをあっさり認めたことに、麻穂は少し驚いた。

「でもね、僕も迷惑してるのがあって、そうしなきゃならないんだ」

急に真剣な表情になった祐真。麻穂は思わず唾を飲んだ。

「どういうこと？」

「もし麻穂ちゃんが、この歳で結婚する相手を決められたらどうする？」

麻穂はハツとした。祐真は理事長の孫娘である麻穂と婚約させられていることを指しているのだと分かったからだ。

「僕は好きな子がいるわけじゃないけど、誰かに好きな相手を決められるのは嫌なんだよね」

祐真は婚約を受け入れているという風に麻穂は聞いていたが、そうではなかったということなのだろうか。麻穂は思わず口を開いた。

「分かるよ、その気持ち！」

急に激しく同意された祐真は少し驚いたように目を見開いた。

「反対の意思を伝えればいいじゃない。駄目なの？」

祐真は目を細めてから、ふうと息を吐いて言葉を続けた。

「親がその縁談を歓迎してるんだ」

その言葉を聞いて麻穂は、受け入れたのは親だけなのだと理解した。婚約を反対するという立場では自分と祐真は同じだということに少し安心した。

「色んな女の子にいい顔してたら、どこかしらで悪い噂が立って婚約破棄にでもならないかと思ってたけど。なかなか難しいね」

だからこの人はそんな振る舞いをしていたのかと麻穂は納得してしまう。

そんな麻穂の表情を見た祐真はクスリと笑った。

「なーんちゃって。今のは全部作り話だよ。真に受けた？」

麻穂は笑わなかった。祐真の目をじっと見つめていた。

「麻穂ちゃん？」

「嘘じゃないでしょう」

麻穂がそう言うと、祐真は笑みを消した。

「分かってるよ、あなたはこの学園の理事長の孫娘と婚約させられてるんですよ」

麻穂がそこまで言うと、祐真は訝しげな表情になる。

「君は何者なの？」

窓から差す夕陽に目を細めながら、麻穂は言った。

「理事長の孫娘、杉浦麻穂よ」

祐真が麻穂を見つめる。

麻穂はじつと彼を見つめ返していた。

が、祐真はまた口元に笑みを浮かべる。

「まさかね。君が理事長の娘だなんて話が上手すぎる」

「ほんとだってば！」

まさか信じてもらえないとは思わなかったので、麻穂は慌てて主張した。

「僕の婚約話を知っている人から聞いたんだろう？」

「違うわ！」

むきになる麻穂を優しくな眼差しで見つめて、祐真はささやいた。

「君は優しい子だね。僕は自分の力でどうにかしてみせるよ」

麻穂は祐真があまりに穏やかだったので、思わず言葉を次げなかった。

その時生徒会室の扉がノックされた。

祐真が返事をする、教師が入ってきた。

「高時、今度の生徒総会のことで話があるんだが」

「はい、すぐうかがいます」

祐真はそう言うと机上の資料をまとめ出した。麻穂に少し視線をやると、

「またね、麻穂ちゃん」

と微笑んだ。

誤解を解きに来たのが、また新たな誤解を生んでしまい、麻穂はどうしたらいいか頭が混乱したまま祐真を見送ることになった。

「どうすればいいのよ」

祐真が行ってしまつて一人になった生徒会室で、麻穂はつぶやいた。

「高時が反対してるってのはよかったよな」

夕食後、寮の部屋で二人は作戦会議を開いていた。

涼は椅子の背もたれに向かって足を広げて反対向きに座っていた。
「それはそうね……でもどうしたら私が本人だって分かってくれるかしら」

麻穂が困ったように口をへの字に曲げる。

床に足を崩して座った麻穂。上目遣いに涼を見上げている。

「んあ、別に高時が反対してるんだからそれで理事長に伝えればいいんじゃないの？」

涼が面倒くさそうに髪をかきあげて言う。

「それもそうね……でも、私が今更、高時祐真も反対しているから婚約解消してって言って、信じてもらえるかしら」

「確かに。高時に直接反対の意思を伝えてもらったほうが説得力あるよな」

「どうしたら信じてもらえるかな……」

涼と麻穂は黙り込んでしまった。沈黙するとドアの外の廊下から女子生徒たちの声がよく聞こえてくる。

麻穂は思わずため息をついた。

「皆はいいなあ、こんなことで悩まなくていいんだから」

涼が仕方ないとはかりに目を細めて笑う。

「きっと自分で好きな人を見つけて、告白したりされたりして、付き合うんだろうな。そして好きな相手と結婚するんだろうな」

そういう麻穂は膝を抱えて体育座りになった。

小柄な麻穂はそうするだけでとても小さく見える。

「麻穂もそうなるために今頑張ってるんだろ」

涼がニツと笑ってそう言う。

「うん、そうなんだけど……」

麻穂がまだ悩んでいる様子を見て、涼はしばらく黙った後、口を開いた。

「よし、気分転換しようぜ」

「気分転換？」

麻穂は顔をあげた。

「ちよつと外行こうぜ」

そう言つて涼がウインクする。

麻穂は目を見開いた。何故なら今はもう八時過ぎ。寮の門限はとつくに過ぎている。

「大丈夫大丈夫。今まで無断外出して、ばれたことないぜ」

涼は上着を羽織つて財布と携帯を手に取った。

「でも、靴がなかったら即ばれるんじゃないの？」

麻穂が不安そうに尋ねると、涼は自分の机の下から靴箱を二つ取り出した。

「俺の無断外出用の靴。古いのもう一足あるから、麻穂履けよ」
あまりに用意周到な涼に麻穂は呆れてしまう。

「でもこの靴大きくない？ 私23・0なんだけど」

「これ、26・0だ。でも走ったりしねえし大丈夫だろ」

涼のあまりに大雑把な扱いに、男の子らしいなあと麻穂は心の中で感心してしまった。

麻穂は言われるがままにパーカーを羽織った。そして部屋の鍵をかけ、寝ているように見られるよう部屋の電気を消した。

涼が靴を履いて先に飛び降りる。麻穂は涼の手を借りて窓からゆつくりおりた。

窓を飛び出すと、背の高い植木が並んでいる。向かいはずぐ住宅街の道路だが、車通は少ない。

街灯のない暗闇を、麻穂は涼のあとを続いていく。涼は何度もこうして無断外出しているのか、すっかり道を分かっているようだった。

寮の裏口へ出る。窓から姿が見えないように腰をかがめて通り過

ぎる。

そしてようやく道に辿り着いた。ここでは寮から確認されることもないだろう。

「涼っていつもこんなことしてるの？」

「だって寮って退屈じゃん」

長い髪を夜風になびかせて、涼が笑う。風にのってシャンプーの香りがした。

涼の案内で道を進んだ。麻穂はまだこの町をよく知らない。

「こんな時間に外に出るってドキドキするね」

麻穂が涼に微笑みかける。

「だろ？ 気分変わるか？」

「変わりそう」

涼の言葉に麻穂はにつこり笑った。

二人は車通の少ない道を進み、近所の大きな公園へと辿り着いた。麻穂がはしゃいでブランコに飛び乗るのを見て涼は小さく笑った。公園には辛うじて街灯がいくつかあり、お互いの顔が見えるくらいには明るかった。

「ブランコなんて久しぶり！」

昔の記憶を思い出してブランコをこぐ麻穂。かなり大きく揺れていた。

涼は近くに落ちていたサッカーボールを拾って、器用にリフティングを始めた。

「涼、うまいね」

「普通だよ」

ポケットに手を入れて器用にボールを足でさばく様子は、長い髪を除いては完全に男の子に見えた。

走るのも速くて運動神経のいい涼は、男の子にしても優れている方なのに、女の子として暮らしていて不審がられないのだろうか。麻穂は思った。

麻穂がブランコから飛び降りる。暗闇に大きな砂をはじく音が反

響した。

「麻穂もやってみるよ」

そう言って涼が、リフティングからそのまま麻穂にボールをパスする。

「うわわっ」

慌てた麻穂は思わずそれを手で受け止めてしまう。

「いきなりこつちに蹴らないでよ！」

「どんくせえなあ。サッカーボールを手で受け止めるなよ」

麻穂が喚くのもきかず、涼は頭の裏をかいた。

「しょうがないでしょっ」

麻穂が涼に向かってサッカーボールを投げる。

しかし、そのボールは涼の頭上のはるか上を通り過ぎて行ってしまった。

「どんくせー」

涼が腹を抱えて笑っている。

麻穂は唇をへの字に曲げて、ボールが飛んで行った方向へ走っていった。

麻穂の背を見てから、涼は空を仰いだ。住宅街で光が少ないせいか、星がたくさん見えた。

「冬になったらもつと見えるな、星」

「次の冬がきて、春になったら私たち高校生だよ」

ボールを持って帰ってきた麻穂がそう言って涼のほうをうかがったが、涼は返事の言葉を濁した。

「ん、ああ」

「高校生になったら、思いっきりスカートを短くしてみたいな。あと、学校の帰りに街に寄ったりしたいし」

麻穂が高校への夢を語る。今の中学三年生の女の子なら、誰もが望みそうなことだった。

涼はじつと虚空を見つめていた。

「涼？」

「俺、高校は杉浦じゃねえんだ。男になって、田舎に帰る。高校生になったら流石に体格的にも男だったの隠せそうにないし、スパイの計画も中学生までだからな」

笑うように言う涼を、麻穂は二つの大きな瞳で見つめていた。

「そう、なんだ。涼がいなくなると寂しくなるよ」

その目を伏せて、本当に残念そうに麻穂は言った。

相手が男でも涼は大切な麻穂のルームメイト。

涼にも麻穂のその気持ちが伝わっていた。

「ありがとな、そう言ってくれて。俺も麻穂が高校の制服着てるところが見たいぜ」

そう言って涼はニツと笑った。涼の笑い方はいつも男らしい。

「そうだ、涼の田舎ってどこなの？」

麻穂がボールを地面に置いて、ブランコの方へ歩きながら尋ねる。

「北海道」

「えっ?! 遠くない？」

麻穂は驚いて振り返る。

涼は当り前だとばかりに「遠いよ」とさらっと言った。

「これからの時期は雪すげえしさみいし、俺は東京の方が住みやすい」

麻穂の目の前のブランコの隣のブランコに、涼は腰掛けた。

「でも、やっぱり田舎は好き。父さんも母さんもいるし、空が広いし」

「そっかぁ」

麻穂は目の前のブランコに座った。

「私は出身がここ東京だから、そういう故郷があるのって羨ましいな」

麻穂の言葉に、涼は違う切り口で切り返した。

「麻穂の家ってすげー豪邸のイメージなんだけど」

「えっ、そんなことないよ」

「家に門あるだろ」

「あるけど……」

「車は？」

「三台……」

「何階建て？」

「三階……」

「お手伝いさんは？」

「三人……」

「ほら、豪邸じゃん」

涼が呆れたように言う。麻穂は苦笑いを浮かべた。

「でも大したことないよ」

「嫌味かコラ」

「おじいちゃんの家の方がもっとすごいよ」

「ああ、理事長か」

麻穂の祖父は杉浦学園の理事長だ。そして、涼を女装して女子寮に忍び込ませている張本人。

「お庭に池とか竹林とかあるし」

「すげー。庭でいいから住ませてほしいわ」

理事長という立場だけあって金持ちだろうとは思っていたが、やはりグレードの違う金持ちのようだった。

空は完全に闇に包まれ、風は肌寒い。月が天頂に昇りつつあり、地面に二人の影を落としている。

「ねえ、涼」

「あん？」

「私、高時祐真とおじいちゃんのところに行ってみようと思う」

麻穂は強い決意と共にそう口にした。

「それで、二人で婚約破棄をお願いしてみる」

「そうか。それがいいんじゃないかねえか。本人が二人反対してるんだしな。うまくいくといいな」

「ありがとう」

麻穂は涼に向かってにつこり微笑んだ。

涼は少し頬を赤くして、顔を伏せた。麻穂は闇の中だったので

くわからなかったようだった。

「よし、そろそろ帰るか。寮長に見つかったらうるさいからな」
「はい」

勢いよく立ちあがった涼。麻穂もそれに続いた。

二人は薄暗い道を歩きながら絶え間なく会話した。お互いの今までのこと。これからのこと。

麻穂は不思議と、涼といると明るくなれる自分を感じていた。涼はその存在と雰囲気で自分の不安をかき消してくれる。そんな気がしていた。涼と友達になれてよかったと心から思うのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6883q/>

ドラスティック・ガール

2011年7月22日03時39分発行